

松本市文化財調査報告No.83

推定信濃國府

— 第二次調査報告書 —

1984.3

松本市教育委員会

推定信濃國府

——第一次調査報告書——

1984.3

松本市教育委員会

序

昭和56年度の惣社宮北遺跡の調査に端を発した推定信濃國府発掘調査は、57年度より国・県の補助事業としてとりあげられ、本年はその第2次調査として行われたものであります。

本年度は指導体制を整え、木下、山中、桐原三先生からご指導を受け、発掘調査では昨年度に引き続き農林水産省蚕糸試験場中部支場のご好意により惣社第三桑園内的一部を調査させていただき、分布調査では惣社町会のご協力を得て惣社地籍内をくまなく調査させていただきました。

調査の結果については本書に記したとおりであり、信濃國府の所在を示すものとの確証は得られませんでしたが、これら資料が今後の調査に役立つものとなれば幸であります。

最後にご指導ご協力をいただきました上記の方々および、関係各位に心からの謝意を表して序といたします。

昭和59年3月

松本市教育委員会

教育長

中島俊彦

例　　言

1. 本書は昭和58年10月24日から11月9日にかけて行われた、重要遺跡推定信濃國府第2次発掘調査報告書である。
2. 本調査は信濃國府確認緊急調査として国庫・県費の補助を受けて行ったものである。
3. 本発掘調査では農林水産省蚕糸試験場中部支場のご理解をいただき、昨年に引き続き同省所有の惣社第3桑園内を調査することができた。記して謝意を表する次第である。
4. 本調査には木下良国学院大学教授、山中敏史奈良国立文化財研究所主任研究官、桐原健長野県史刊行会編纂委員の三先生にご指導をいただいた。記して謝意を表する。
5. 本書の執筆は各調査員が分担して行ったが、部分的には第1次報告書の再掲部分もある。また内容については指導者・調査員で検討し合う時間がとれなかったため、執筆者の判断によって記した。なお文責は文末に記した。
6. 本書の編集は事務局が行ったが神沢が主体となり、滝沢智恵子の助力を得た。
7. 遺物の整理は柴田尚子、松原方子、上平道子氏が当り、実測、トレースは専ら神沢が行ったが、伊那史彦氏の助力も得た。他に原稿・表・図の整理には倉科由加理、柴田尚子、吉田浩明氏の助力を得た。なお古瓦については横田作重氏が撮影、拓本を担当し、トレースは三村竜一氏が行った。
8. 遺物の写真撮影は林宰男氏が行った。
9. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。

目 次

序

例言

目次

第1章 発掘調査に至る経過

第1節 第1次調査の概要と調査に至る経過 5

第2節 調査体制 6

第3節 調査日誌 7

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の自然環境 11

第2節 周辺遺跡 11

第3章 発掘調査

第1節 調査の概要 14

第2節 造構と遺物 17

1. 住居址 17

2. 溝状遺構 20

3. 碑群 26

4. ピット群 26

第4章 分布調査

第1節 総社地区 27

第2節 大村地区 28

第3節 古瓦の分布について 42

結び 49

挿 図 目 次

第1図 発掘及び分布調査位置	4	第14図 分布調査採集遺物 (1)	31
第2図 周辺遺跡	13	第15図 分布調査採集遺物 (2)	32
第3図 発掘調査区	14	第16図 分布調査採集遺物 (3)	33
第4図 遺構全体図	15	第17図 分布調査採集遺物 (4)	34
第5図 第1号住居址	18	第18図 分布調査採集遺物 (5)	35
第6図 第2号住居址	19	第19図 分布調査採集遺物 (6)	36
第7図 溝状遺構	21	第20図 分布調査採集遺物 (7)	37
第8図 第1・2号住居址出土遺物	23	第21図 分布調査採集遺物 (8)	38
第9図 溝状遺構出土遺物	24	第22図 分布調査採集遺物 (9)	39
第10図 第2号住・礫群・検出面出土遺物	25	第23図 分布調査採集遺物 (10)	40
第11図 検出面出土遺物	26	第24図 分布調査採集遺物 (11)	41
第12図 分布調査(惣社地区)	29	第25図 古瓦	48
第13図 分布調査(大村地区)	30		

表 目 次

1 発掘出土遺物集計表	51
2 分布調査採集遺物集計表	52
3 土器観察表	57
4 石器一覧表	64
5 鉄器一覧表	64

図 版 目 次

図版 1	桑園近景 発掘状況	65
2	発掘状況	66
3	発掘状況 現地指導	67
4	現地指導 第1号住居址	68
5	第2号住居址 遺物出土状況	69
6	溝状遺構	70
7	ピット群、礫群	71
8	礫群 堀り上げ全景(1)	72
9	堀り上げ全景(2)、埋め戻し作業、調査参加者	73
10	分布調査地(1)	74
11	分布調査地(2)	75
12	分布調査地(3)、発掘地点よりみた惣社(伊和神社)	76
13	出土遺物(1)	77
14	出土遺物(2)	78
15	出土遺物(3)	79
16	表採遺物(1)	80
17	表採遺物(2)	81
18	表採遺物(3)	82
19	表採遺物(4)	83
20	表採遺物(5)	84
21	表採遺物(6)	85
22	瓦、木鼻	86



第1図 発掘及び分布調査位置図

第1章 発掘調査に至る経過

第1節 第1次調査の概要と調査に至る経過

第1次調査は信濃国府推定地の一つで惣社（伊和神社）西側の農林水産省蚕糸試験場第三桑園を中心とした発掘調査と、発掘地点の東側および北側1kmあまりの範囲を表面採集した。その結果は発掘調査では4軒の平安時代の住居址と、土壙が5ヶ、礫群と溝などが検出されたが出土遺物は土師器、須恵器の壺、甕、四耳壺などで、これが国府に関わるものかどうかの判断となる資料は得られなかった。一方表面採集では東地区の里山辺では広範囲にわたって土師器、須恵器が主として採集され、また北地区の本郷大村でも土師器、須恵器が多数表採された。国府が松本にあった時代は平安・鎌倉時代というので、これら遺物は同時期にありその点何らかの繋がりを感じさせ、今後の調査に資料を提供した。

第1次調査の折にも他県の国府調査の例もあって、少なくとも5年計画ぐらいの長期にわたっての調査を覚悟しなければ到底解明できるものではないとの話があり、本年はその第2次調査として国の補助事業にとりあげていただいた。総事業費は200万円でうち補助率は国が50%、県が15%、残り35%が市負担である。

本年度の調査も第1次調査と同じく農林水産省蚕糸試験場中部支場第3桑園内を発掘調査させていただくべく10月11日（火）に同支場へお願いに行く。その結果、現在桑の移植のため空いている北西側畠を発掘調査してもよい旨の快諾を得る。

本年度は調査体制の充実という点で、特に指導者として後述の三先生にご指導をいただくべくお願いした。また調査は発掘調査と表面採集の二本立てで行うこととし、特に表面採集は惣社地区内をくまなく調査することとした。

各種届出、通知は昭和59年2月末日までは下記のとおりである。

58年1月8日 昭和58年度文化財関係補助事業計画書提出

4月13日 昭和58年度文化財関係国庫補助事業の内定通知

5月31日 同補助金交付申請書提出

- 9月3日 昭和58年度文化財保護事業県費補助金の内示
 9月20日 同補助金交付申請書提出
 10月12日 推定信濃國府跡発掘調査についての通知を提出
 11月11日 埋蔵文化財収得届・同保管証提出
 12月1日 文化財関係国庫補助金の額の確定通知
 12月19日 埋蔵物の文化財認定について通知
 59年1月26日 文化財関係補助事業にかかる状況報告について提出

第 2 節 調 査 体 制

指導者	木下 良	国学院大学教授
	山中 敏史	奈良国立文化財研究所主任研究官
	桐原 健	県教育委員会専門主事（県史刊行会）
調査団長	中島 俊彦	教育長
調査担当者	神沢昌二郎	社会教育課文化係長、日本考古学協会員
調査員	山田 瑞穂	三郷小学校教諭
	西沢 寿晃	信大医学部職員
	三村 雄	会社員
	山越 正義	生坂中学校教諭
	横田 作重	会社員
	降旗 俊行	松本保険事務所職員
	森 義直	大町高校教諭
事務局	田堂 明	社会教育課長
	神沢昌二郎	〃 文化係長
	百瀬 清	〃 〃 主事
	熊谷 康治	〃 〃 〃
	直井 雅尚	〃 〃 事務員
	高桑 俊雄	〃 〃 諸託
協力者	惣社1丁目町長	田中長治
	惣社2丁目町長	笠平精一
	惣社3丁目町長	西村清治
	惣社公民館長	原 義男

前田良平、丸山とりみ、中村リュ江、神田林虎衛、神田林とめ、堀江摶子、市川悦子、松原方子、橋詰阿さ子、上平道子、渡会利子、清水真理、早川鈴子、三村竜一、山田真一、三村泉

あがた考古会 濑川長広、大出六郎、三沢元太郎、柴田尚子

なお整理作業は進行中であるので1月以降の協力者の名前を省略した。

第 3 節 調 査 日 誌

58.10.21 (金) 調査打合会議、あがたの森にて

出席者 森、三村、西沢、横田、山田、熊谷、神沢、直井

10.24 (月) 晴 バックホーによる表土はぎ、午後、資材運搬、テント設営

参加者 三村、横田、瀬川、熊谷

10.25 (火) 晴 検出作業開始 住居址、溝等検出 テレビ松本、朝日新聞より取材

参加者 前田、丸山、中村、清水、神田林(ト)、神田林(ト)、瀬川、堀江、市川、松原、三沢、橋詰、上平、渡会

10.26 (水) 晴のち曇り風強し 1住掘下げ A～Eグリットを設定し掘下げ、Cグリット中心に方形の落込みあり。市民タイムズ、中日新聞より取材

参加者 三村、横田、前田、丸山、中村、清水、神田林(ト)、堀江、瀬川、市川、松原、橋詰、三沢、上平、渡会

10.27 (木) 曇り 溝の南側検出作業 径15～60cm大のビット17+検出、1住掘下げ継続 C、Dグリット内の方形の落ち込み確認

参加者 前田、丸山、清水、神田林(ト)、市川、松原、三沢、橋詰、瀬川、上平、中村

10.28 (金) 晴 1住ベルトを残して掘り上げる。南側礫群あらい出し。2住掘り下げ開始。

溝1、3の掘り下げ開始、遠方測量の基準タキ設定

参加者 前田、中村、上平、渡会、大出、神田林(ト)、神田林(ト)、清水、三沢、市川、松原、橋詰、瀬川、三村(り)

10.29 (土) 晴 1住と2住の周辺検出。2住内の礫と2住西側に続く礫洗い出し。溝1、3掘り下げ継続。溝2、4掘り下げ開始 南側礫群の実測

参加者 中村、神田林(ト)、神田林(ト)、渡会、瀬川、市川、松原、橋詰、上平、清水、三沢、大出、三村(り)

10.30 (日) 晴 南側礫群の南3ヶ所を掘り石の列び確認、実測も継続、1住、2住周辺の小礫洗い出し、1住精査、礫の確認、落ち込み半剖、溝掘り下げ継続。

- 参加者 三村、横田、丸山、中村、神田林（と）、市川、松原、橋詰、清水、瀬川、三沢、大出、三村（り）、上平
- 10.31（月） 晴 南側縫群の3ヶ所のグリットの実測。ピット掘り。他に1住縫掘り出し。2住内サブトレーン掘る。
- 参加者 丸山、中村、神田林（と）、神田林（と）、堀江、市川、松原、橋詰、渡会、瀬川、清水、三沢、大出、三村（り）、山田、上平
11. 1（火） 晴 上下の山を削り溝の続きを確認。南東隅の溝掘り下げ、溝の実測。1住ベルトセクション実測。1住ベルト外し。
- 参加者 清水、瀬川、大出、三村（り）
11. 2（水） 晴 溝内の縫実測完了。1住内ピット半割セクション実測。2住ベルトセクション実測。2住内硬たち切り、地区内北半分実測。
- 参加者 清水、三沢、瀬川、大出、三村（り）、山田
11. 3（木） 晴 溝のベルトセクション実測。地区内北半分実測難続。レベル読み。1住内ピット掘り上げ。2住ベルト外し精査
- 参加者 三村、森、三村（り）、清水、瀬川、山田
11. 4（金） 曇 2住精査、溝のベルト外し、1住写真撮影、溝内、1住、ピット1の遺物取り上げ、午後桐原、木下、山中諸先生現地視察、夕方5：30より本庁東会議室にて三先生を囲んで検討会を行う。
- 参加者 三村、森、横田、三沢、瀬川、大出
11. 5（土） 曇 写真撮影、溝、1住、2住、南縫群、ピット群、全体撮影、溝内の縫を取り除き掘り上げ、溝の続きを確認、全体清掃。山中先生、森、神沢、熊谷で遺跡周辺調査
- 参加者 森、三沢、瀬川
11. 7（月） 曇のち晴 南側の溝と縫群を切ってみる。縫の埋め戻し、1住、2住のセクション及びピット実測。他方遺物整理をあがたの森で開始
- 参加者 横田、大出、柴田
11. 8（火） 晴 溝の東側確認作業。セクション実測。10時より重機にて埋め戻し作業。1住、2住、ピット群写真撮影。市民タイムズ取材
11. 9（水） 曇 手作業による埋め戻し。資材撤収し、島立へ運搬、土器整理行う
- 参加者 大出、三沢、瀬川、柴田
11. 10（木） 曙のち小雨 土器洗い
- 参加者 柴田
11. 11（金） 晴 土器洗い

参加者 柴田

11.12 (土) 曇のち雨 土器洗い

参加者 柴田

11.18 (金) 小雨のち晴 分布調査、惣社南側を中心にまわる。昼食は惣社公民館を借りる。

参加者 三村、西沢、横田、瀬川、大出、三沢、前田

11.27 (日) 快晴 分布調査、惣社周辺の表面採集及び聞き取り調査、午後は瀬川左岸を調査

参加者 西沢、三村、瀬川、大出、三沢、横田、早川

11.29 (火) 快晴 分布調査、惣社地区北側周辺表面採集及び聞き取り調査

参加者 西沢、三村、横田、瀬川、三沢、大出、早川、前田

12.4 (日) 晴 分布調査、惣社地区西及び西南部表面採集及び聞き取り調査

参加者 西沢、三村、三沢、横田、瀬川、大出、前田、早川、三村いづみ

12.6 (火) 晴 分布調査、惣社周辺の総括と聞き取り調査

参加者 三村、前田、神田林、瀬川、大出、三沢

12.30 (金) 晴 遺物一覧表づくり

59.1.3 (火) 晴のち曇 土器実測

1.9 (月) 晴 古瓦調査、土器実測、土器註記

1.10 (火) 晴 土器実測、土器註記

1.11 (水) 雪 土器実測、土器註記

1.15 (日) 曇 土器実測、古瓦調査

1.16 (月) 晴時々曇 土器実測

1.17 (火) 晴 石器実測、土器註記

1.18 (水) 雪 石器実測

1.19 (木) 雪 土器・石器トレース

1.21 (土) 晴のち曇 土器・石器トレース

1.22 (日) 雪 古瓦調査

1.23 (月) 晴一時曇 土器・石器トレース

1.24 (火) 晴 古瓦調査、土器・石器トレース

1.25 (水) 晴 図プレートはり、一覧表づくり

1.26 (木) 雪 図プレートはり、一覧表づくり

1.27 (金) 晴時々曇 一覧表づくり、図プレートはり

1.28 (土) 雪 図プレートはり

1.31 (火) 大雪 土器実測

- 2.1 (水) 晴 土器実測
2.2 (木) 晴のち曇 石器実測
2.3 (金) 雪 石器実測トレース 表づくり
2.4 (土) 晴 地図トレース 表づくり
2.5 (日) 曇 図プレートはり 表づくり 古瓦調査
2.6 (月) 雪 図プレートはり 遺構トレース
2.7 (火) 雪 遺構トレース 表づくり
2.8 (水) 雪のち曇 表づくり
2.9 (木) 雪のち曇 表づくり
2.10 (金) 雪のち晴 遺構図整理 スクリーントーンはり
2.11 (土) 晴 分布調査図スクリーントーンはり 同一覧表づくり
2.12 (日) 晴のち曇 分布調査整理
2.13 (月) 曇時々雪 表 清書 分布図スクリーントーンはり
2.14 (火) 晴 表 清書 遺物写真撮影
2.15 (水) 晴一時曇 表づくり 清書
2.16 (木) 晴 図整理
2.17 (金) 雪 図整理
2.20 (日) 晴 表整理
2.21 (月) 曇のち晴 表整理
2.26 (日) 雪 原稿作成
2.27 (月) 曇 原稿作成
2.28 (火) 晴 原稿作成
2.29 (水) 晴 原稿作成 図版作成 割りつけ作業

以下印刷所渡し

(事務局)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の自然環境

地形地質について

本遺跡は、松本市市街地の東端惣社地籍にあり、松本市東部を形成した薄川による扇状地と、女鳥羽川による扇状地との境界付近にある。

薄川は三峯山の西側を源流とし鉢伏山の東北を通り、美ヶ原付近の水を集め入山辺地区から西流し旧松本市南端を流れて田川と合流している。薄川の特徴は下流で堆積物が異常に厚いことであり松本市一帯の地盤沈下など構造上の問題にも関係すると考えられている。堆積物は流域の岩石である緑色変質火山岩、石英閃綠岩、安山岩、玢岩などの礫を主体としている。

女鳥羽川は三才山付近に源を発して西流し、本郷の稻倉で南流に転じて松本市街地の北から流入する河川で、松本市白板付近にて田川と合流する。堆積物は上流で新生界第三系の内村層とそれに貫入した玢岩を浸食して流下するため、砂岩、玢岩などの礫が多い。

薄川、女鳥羽川両河川により形成された扇状地について

薄川により形成された扇状地は、扇頂を入山辺地区南方付近とし、南は和泉川付近、北は清水付近の湯川を境として女鳥羽川の扇状地に接し、西は旧松本市の市街地に達している。本遺跡は湯川の南西200m付近にあり、薄川扇状地の最北端に位置している。

女鳥羽川により形成された扇状地は、本郷の稻倉付近を扇頂とし、本郷や岡田に広い扇状地をつくり、湯川を境として薄川の扇状地に接し松本市の北部を形成している。

なお本節は第1次調査報告と変化がないので再掲した。

(森 義直)

第2節 周辺遺跡

この項についても前年調査報告書を出しているが、僅かに新知見が増えたのみで変りがないので第1次の報告書の部分を再掲する。

縄文時代、山麓から平地までその遺跡の範囲は広い。薄川上流の右岸段丘上に、中・後期のおりど、おやしき遺跡があり、順次下って、上金井、矢崎、古宮（中期）、堀之内、針塚（前期）、堂前遺跡（中期）があり、薄川左岸では厩所、橋倉、林山越遺跡があり、特に林山越遺跡からは石棒2本が出土している。下って四谷遺跡からは中期後半に属する完形土器が、埋橋遺跡では凹石と石棒

が出土している。本郷地区に入ると雪中遺跡から曾利III式併行の深鉢が水田の中より、からし畑遺跡でも曾利III式併行の深鉢と後晩期土器の出土をみている。また県営野球場西の柳田遺跡からは中期と晩期の遺構、遺物の検出があり、女鳥羽川底の女鳥羽川遺跡で晩期の遺物が出土している。

弥生時代 弥生時代の期間が400~500年の短期間のためもあってか、遺跡数は少ない。薄川右岸の古宮遺跡の僅か東に鎌田遺跡（後期）があり、やや下って段丘南辺に針塚遺跡がある。ここからは条痕文の壺が既出しているが、57年3月の調査で再葬墓とわかり、その埋納された壺の中には遠賀川系と思われるものが含まれている。下ってあがた遺跡からは中期後半以降の百瀬式の壺や石器製造場と思える遺構などが検出されている。平地に入って元町七本松周辺の元屋敷遺跡からも、中期後半から後期にかけての出土がある。また、今回調査範囲内の宮北遺跡からも後期の壺が検出されている。薄川左岸では松本工業高校遺跡、筑摩遺跡からも破片の出土をみている。

古墳時代 山辺地区には山麓と平地にかけて18基の古墳があり、本郷地区でも24基がある。山辺地区の古墳の中には6基の積石塚古墳があり、本郷地区には9基の積石塚古墳がある(1)。

奈良・平安時代 この時期になると遺跡数が増え、平地では現在の集落とはほとんど重なっており又縄文時代の遺跡と重なるものも多い。薄川右岸上流からみると、おりど、おやしき、上金井、矢崎、鎌田、古宮、堀之内、兎川寺、新井、荒町、下原、左岸では廐所、穂倉遺跡があり、更に西に下ると松本工業高校、富士電機工場、神田、筑摩遺跡等があり、薄川右岸に戻るとあがた、松商学園、県ヶ丘高校、西小松、蚕糸公園遺跡など全面に広がっている。いずれも土師器、灰釉陶器等が出土している。特にあがた遺跡では縁釉段皿が既出しており、54年の発掘調査では前記弥生時代の堅穴住居址のほか、平安の住居址が1軒検出され、その床面からは金メッキされた釦子が出土している(2)。松商学園からは八稜鏡が出土している(3)。

昨年の第1次調査の表面採集の結果、里山辺新井、下原遺跡の範囲が適確となり、またその中心部分が下原遺跡では山辺中学校南側の住宅地、新井遺跡は里山辺消防署南東300mあまりの地点である(4)。

（神沢 昌二郎）

参考文献 (1)(3)「長野県史考古史料編遺跡地名表」長野県教委 昭和57年

(2) 「あがた遺跡」 松本市教委 昭和56年3月

(4) 「推定信濃國府」第1次 松本市教委 1983.3



○発掘地点

- 1.おりど・おやしき遺跡
- 2.上金井遺跡
- 3.鎌田遺跡
- 4.矢崎遺跡
- 5.堀の内遺跡
- 6.兎川寺遺跡
- 7.針塚遺跡
- 8.荒町遺跡
- 9.下原遺跡
- 10.新井遺跡
- 11.惣社北遺跡
- 12.横田遺跡群
- 13.大村遺跡群
- 14.元屋敷遺跡
- 15.女鳥羽川遺跡
- 16.清水遺跡
- 17.西小松遺跡
- 18.県ヶ丘高校遺跡
- 19.豪糸公園遺跡
- 20.松商学園遺跡
- 21.松本工業高校遺跡
- 22.富士電機遺跡
- 23.神田遺跡
- 24.筑摩東遺跡
- 25.三才遺跡
- 26.筑摩遺跡

第2図 周辺遺跡

第3章 発掘調査

第1節 調査の概要

今回の発掘調査は第3図のごとく、57年度調査箇所の約50m北側の僅かに東寄りに位置し、東西20m、南北約40mの桑園を調査したが、遺構としては平安時代後半の竪穴住居址2軒と、完掘はできなかったが、巾1.5mあまりのコの字状に曲る溝および小ピット20本である。その他、南側部分では前年度調査で検出されたと同様的一面に礫の続く部分が検出された。これら遺構は全面的に浅く地表下30~40cmあまりで、耕作により壁面などは既に削平されていた。

出土遺物も少量であり別表で示すように350片あまりしかなく、総重量でも、2.7kgでしかない。主なものは第1号住居址の床面より出土した完形の土師器壺一点程度で、他には特記する程のものがない。



第3図 発掘調査区（桑糸試験場第3桑園）

第 2 節 遺構と遺物

1 住居址

(1) 第1号住居址（第5図・第8図）

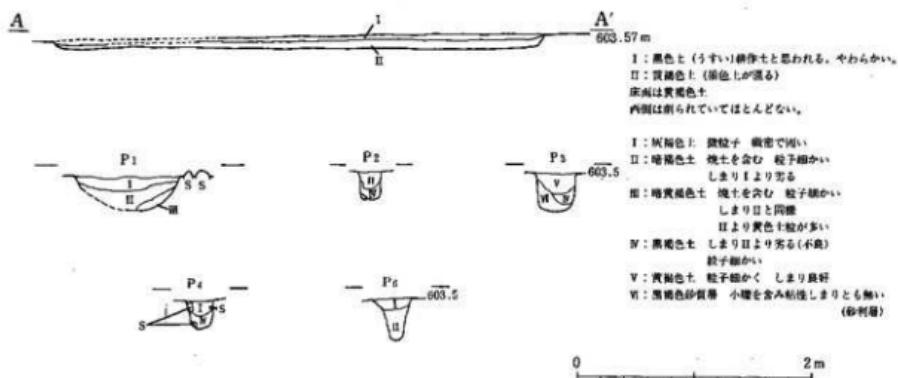
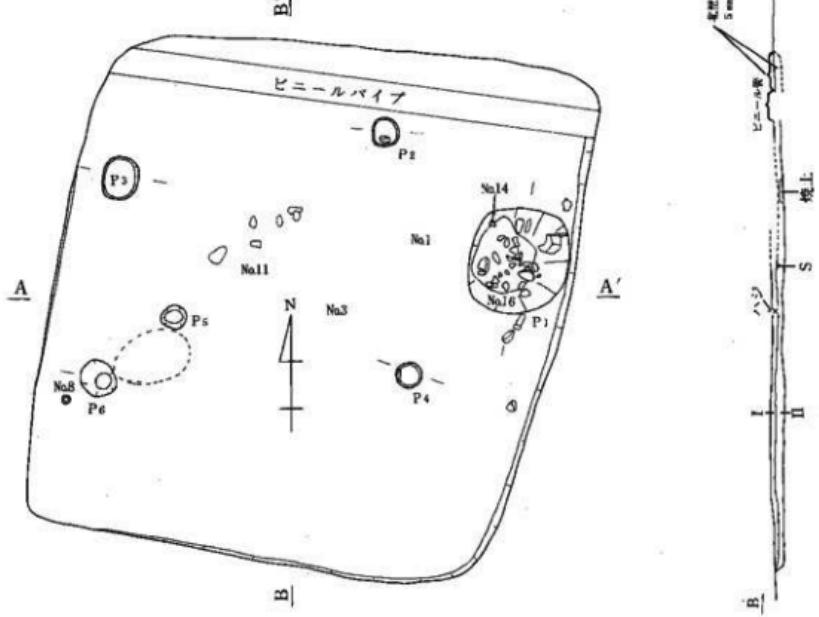
発掘調査区のほぼ中央で検出され、その北側2m余りに第2号住居址が検出されている。プランはほぼ正方形であるが菱形に変形している。大きさは東西4.3m×南北4.4mで、主軸はほぼN-78°-Eを指す。壁は北側が攪乱により不確定である。地形がやや西に傾くために、壁高は西側が5cm、東側は10cmあまりしか残っておらず、傾斜も僅かである。床面ははっきりしており、ほとんど水平である。しかし北側には東西にパイプが配管されており攪乱のため不明である。柱穴と思われるものはP2(22×26,-34cm) P3(30×36,-40cm) P4(22×23,-27cm) P7(31×31,-34cm)の4本であり、その土層は図示したごとく、灰褐色土と暗褐色土の変化の少ないものである。カマドは検出されなかったが西寄りのP7に接して、東西70×南北50cmあまりの焼土の範囲があり、耕作による攪乱で確認はできなかったが、焼土の西側住居址外にも焼土が飛んでいたので煙道が西に続いているのかも知れない。またP1(84×90,-27cm)には最大20cmから拳大の礫が入っており焼土が混入していた。

遺物は床面で土師器、灰釉陶器、中世陶器片など小破片があったにすぎず、時期の特定の決め手になるものも少ないと、土師器片などより平安時代末期に位置するものとみた。

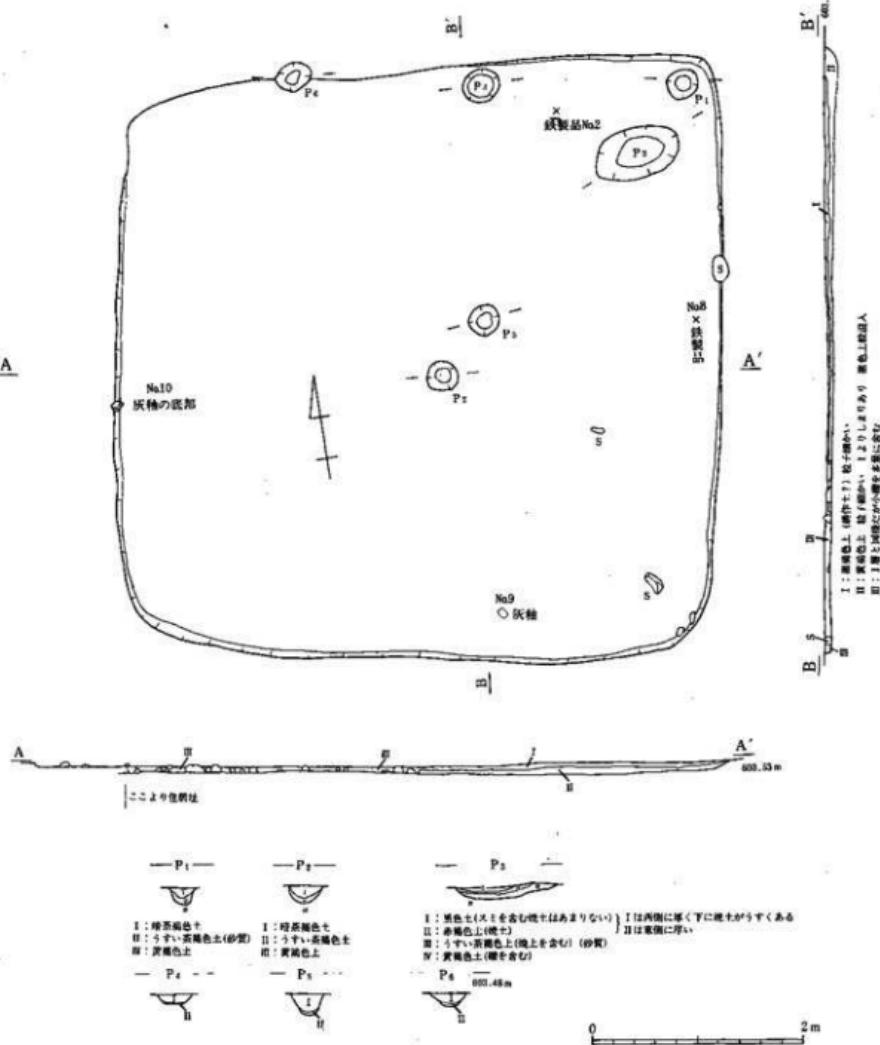
(2) 第2号住居址（第6図）

発掘地点のやや北寄りにあり第1号住居址と並んでいる。主軸はN-79°-Eでプランは方形で大きさは東西5.6×南北5.8mであるが、住居址の西側半分は自然堆積による礫層があらわれてはっきりしにくい部分もある。残存する壁高は5cmあまりで、壁の傾斜は不明である。床面は東半分がはっきりしており、堅いが、東壁に接する部分でも粗い小砾層があり、起伏する砾層の上部に住居址がつくられたものと思われる。西側の砾層をたち切ったが、礫は15cm大のものもあり深く続いているようである。その範囲は第2号住居址の西側一帯に広がっている。柱穴はP1(32×28,-16cm) P2(32×28,-12cm) P4(36×32,-11cm) をみたいが、西側については不明である。カマドははっきりしないが東北隅のP3(80×48,-9cm)上部には焼土の範囲が東西に長く広がり、壁外の東側にも径約30cmの焼土部分があったのでこれが煙出ではないかと思われる。

遺物は土師器破片、灰釉陶器、鉄製品などであるが、住居址外東側からは石錠1点も検出されている。出土量は絶じて少ない。本址の時期については土師器片などからして、平安時代末期とみた。



第5図 第1号住居址



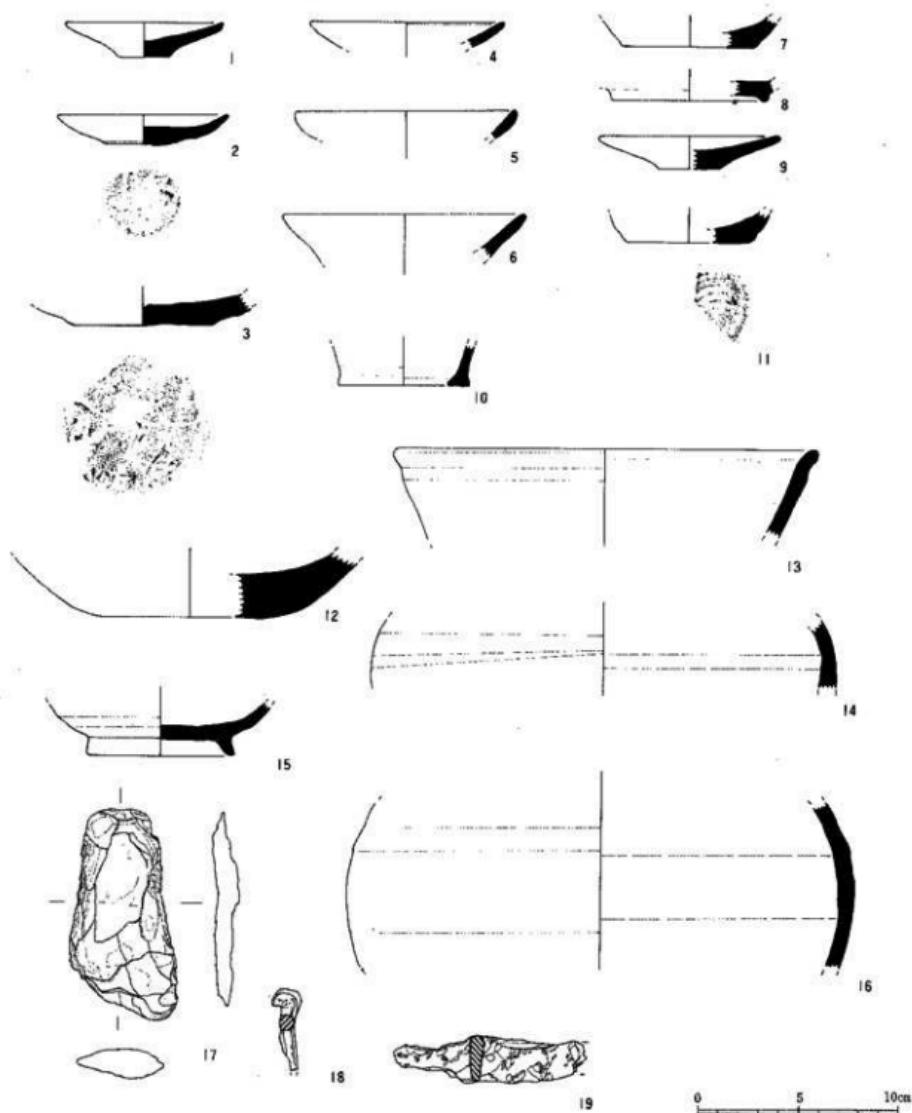
第6図 第2号 住居址

2 溝状遺構（第7図）

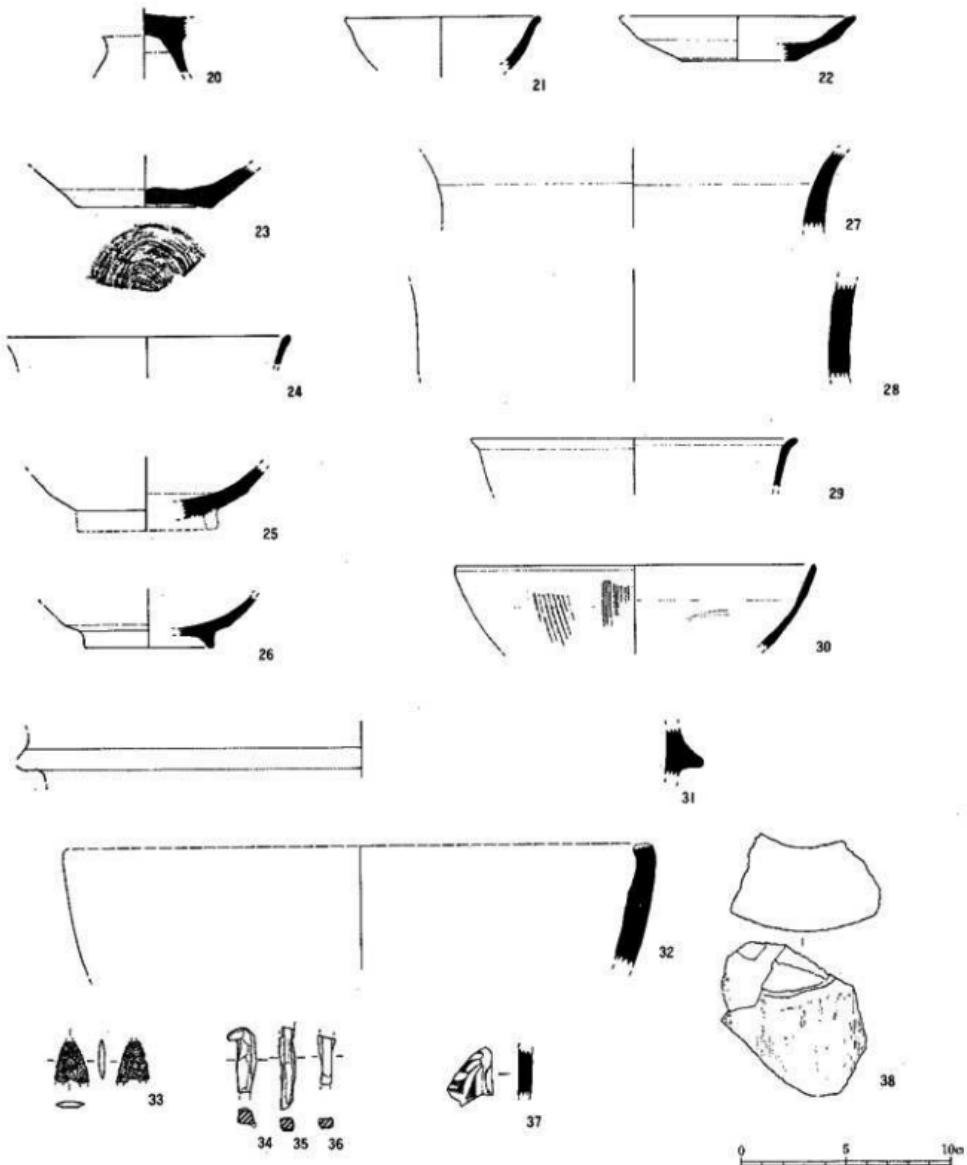
発掘調査区南寄りに東西に巾1.5mあまりの溝状遺構があらわれ、その範囲を追求したところ、溝状遺構は西側ではほぼ直角に折れ曲り、南走して更に東へ「コ」の字状に続いていることが判明した。西側は堆土、東側は農地のため完掘はできなかつたが、その規模は北側が東西12m、西側も12mあまり、南側は東端の確認ができないが、検出部分までは12mあまりである。南側の溝については疊群の中のわずかな土色の差異をもって判別したが、他は農道にかかるため部分的にしか掘れなかつた。溝状の主軸はW-4'-Nで、溝内には最大40cm、最小10cm大の礫があたかも投げこまれたように無作為に入つており、その中でも割れた角のある石が目立つた。礫は溝の底にはついていはず溝廃絶後ある程度の時間差があつてから、溝が埋められたと思われる。礫の取り上げ後の形は底の平らなU字形の溝で、東端が高く西へは30cmあまりの勾配がついている。深さは検出面より約50cmである。溝の東端は溝底を掘りくぼめて石を捨てた状態に受けとれる。溝の下部は約10cmの厚さに黄褐色土に砂利混りの層があり、その下は小礫混りの砂利層となつてゐる。

溝内の出土遺物は土師器の小破片が多く、他に灰釉陶器、中世陶器、フイゴの口などが出でおりその出土層は下部の黒褐色土層が最下層で、多くは疊と共に出土している。注目することは第8図24に示した綠釉陶器の小破片の出土したことである。

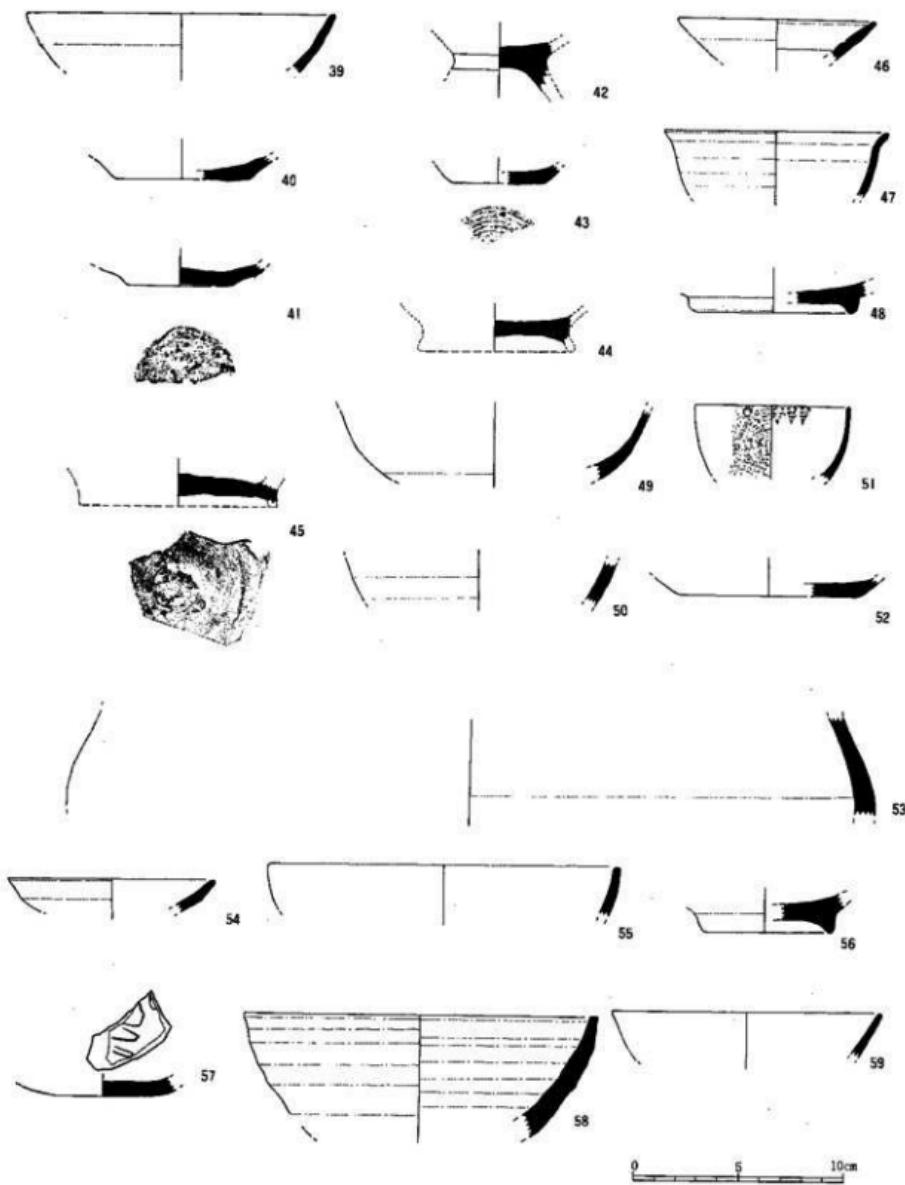
しかしこの溝が果して何なのか、何故「コ」の字状になつてゐるのか、また時期的には何時作られたものかはっきりしない。西側の勾配の一番低い位置に更に溝が続いていれば水はけのためとも言えるが、これも推測の段階を出ない。又、溝内の遺物についてみると、時期的に一番新しいものは泥メンコで江戸時代。一番古いものは綠釉陶器で下つても平安時代と時期差が大きく、一番遺物の多い土師器の時期を溝の廃絶した時期とみて、平安末期として考えたい。



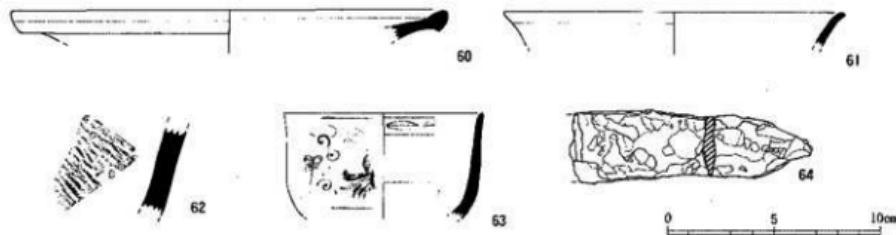
第8図 第1・2号住居址出土遺物



第9図 溝状遺構出土遺物



第10図 2号住跡群・検出面出土遺物



第11図 検出面出土遺物

3 磚群（第7図）

今回発掘地点の南側部分にW-30°-Nの線で最大60×30cm、平均的には10~20cm大の磚がほとんど平らに広がっており、その状態は57年度発掘調査で検出された磚群と類似している。ただこれも北側の端部をみているのみで、全貌をうかがうことはできないが、南側の3ヶ所のトレンチではいずれも磚が統いており、この範囲が広いことを推測させる。しかし東部トレンチでは磚がまばらになっており、このあたりの線が東側の限界かとも思われる。

この磚群が人為的なものか自然のものかについてははっきりしないが、大磚一箇だけについて少しばかりの洪水では動きそうもないで人為的に置かれたものではないかと思われる。この磚の下には僅かにシルト層があり、その下は砂利層となる。他の磚群の下も磚泥りの砂利層があり、これが所々に地表面に顔を出しているものと思われる。

伴出遺物は磚群に関わるものではなく、その覆土および検出面より灰釉陶器、中・近世陶器など少量が検出されているが、これらは、本発掘地点における全般的傾向である。

4 ピット群（第7図）

溝状遺構に埋まれた中にピットが19本あり、いざれも10cmにも満たない深さであり、大は径60cm、小は径12cmで差が大きく、このピットがどのような遺構に伴うのか、またピット独自で何の遺構を示すのかわからない。

第2号住居址の北側にも4本のピットが検出されたが、この方は30cm近くの深さを保っているが4本の配列に規則性がなく、強いて言うならば西の1本を除いて3本のピットはW-40°-Nの線で一直線になるが、その間隔は4.2m、3.7mと不揃であり結局のところ何の為のピットか不明である。

（神沢昌二郎）

第4章 分布調査

概要

昭和57年度の分布調査は発掘地点の惣社第3桑園の東側、1kmあまりの里山辺地区と、北側2kmあまりの大村地区を中心に行ったが、本年は惣社地区内に表面採集の行える地点は落ちなく調査を行うこととして、地元の町会長に依頼して全世帯に調査の主旨と協力依頼のチラシを配布し、公園をもとに10名あまりで延4日間調査を行った。調査の仕方は表面採集と聴き取り調査で、採集遺物は一筆ごとに記録にとどめた。

また57年度に行った大村地区においても、今回の調査とは別に地元横田作重氏が平常調査された採集結果をも加えた。また、布目瓦の分布についても既報告資料をも含めて調査を行った。

第1節 惣社地区 (第12図、第2表)

79ヶ所にまとめて調査を行った。宅地・水田等については調査がしにくく、勢い畠地中心となつたが、惣社地区内の大凡は把握できたといえよう。ただ採集遺物のうち近世以降と思われるものはつとめて割愛した。それは国府所在時期が平安・鎌倉時代であるので、古代・中世に主力をおいたためである。

これでみると全域にわたって量の多少はあれ中近世の遺物があり、土師器、須恵器、灰陶陶器は今回発掘調査をしている惣社(伊和神社)西側が圧倒的に多く採集されている。それと共に湯川と藤井沢合流点西側ブドー畑でも予期以上の破片が採集された。前者は西側に低湿地を持つ微高地であり、後者は湯川脇でありながら島状に高い地点で、それはNo57、58も同様であり、湯川の氾濫を避け得たものと思われる。

これに対して湯川をはさんでNo52~56の両岸は少量しか採集されない、湯川の左岸(No53)での調査では吉田保明氏(80才、横田八反田41)より聴取ったが、58年9月28日には大雨によりNo70から53あたりにかけて一面に水がついたという。自宅には掘井戸があり三間半程掘ってあるというが、現在水位は5.2mであった(11月3日)。なおこの井戸は薄川系の水で良質であるが、湯川右岸では女鳥羽川水系で湧水であるとのことであった。湯川右岸のNo54~56一帯はブドー畑、市民農園、宅地となっているが東寄りには新しく住宅が建てられており、西村真一氏完工事現場の掘削断面では0~30cm埋土、30~48cm耕作土、48~55cm溶脱層、赤褐色砂礫土層、55~80cm砂利層とシルト状砂

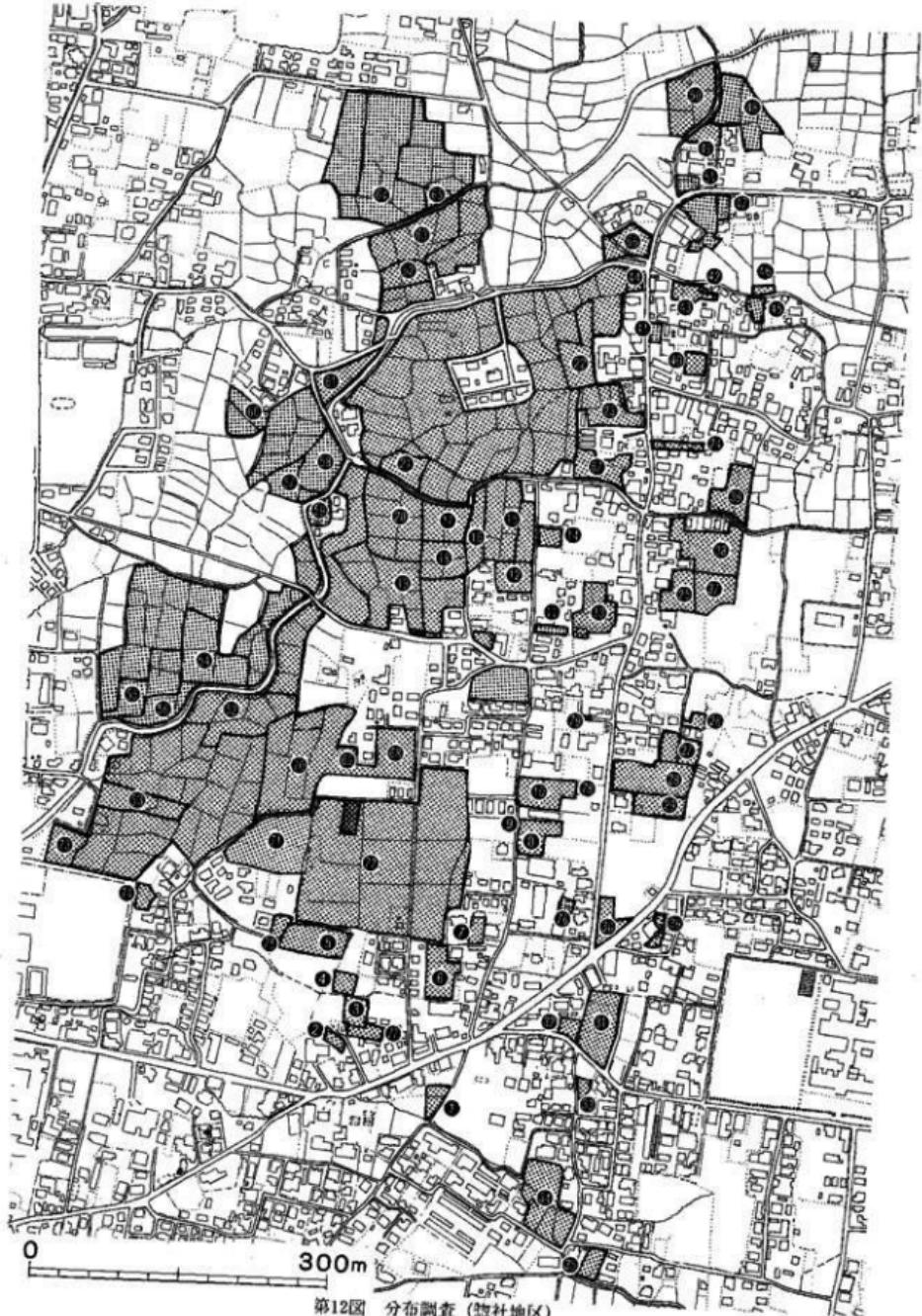
層(茶褐色)80~130cm、シルト層となっており、過去において生活面があったことを伺わせる何物もない。このあたりは小字では『下の丁』と言われているが、地形的にみれば湯川により浸水しやすい場所であったと思われる。これと同様に遺物の採集されなかつたNo15~22周辺の果樹園、水田でも、特にNo61の対岸あたりでは今回湯川の増水により溢水している。No79の道路では下水工事中の掘削箇所があり、ここでは地表下1mの茶褐色土層より土師器の小片を採集している。

これら標高601~608mラインに対して、610m前後のラインでは集落とその東側に遺物が出土しており、伊和神社東側の南北に走る道路の両脇に当るということからすると、この道と遺物の分布との関わりがあるのではないだろうか。

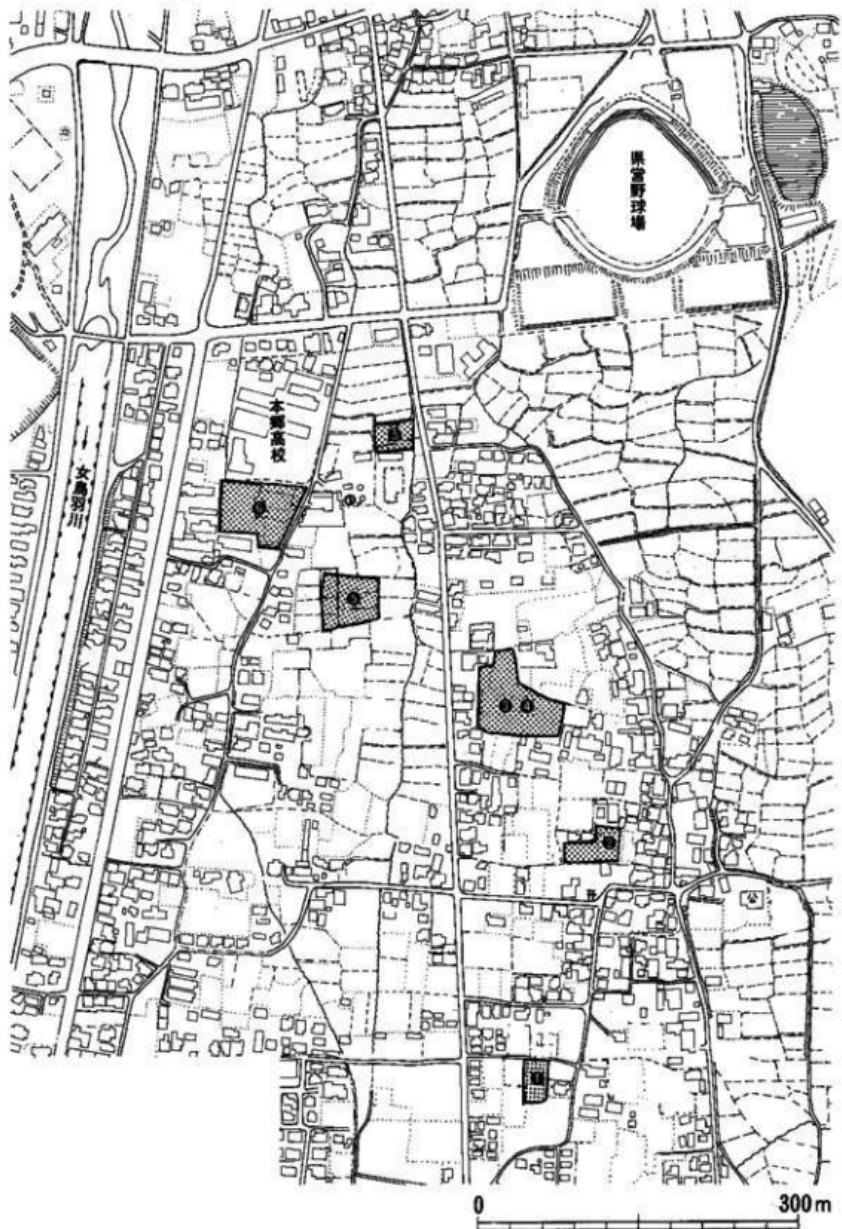
第 2 節 大村地区 (第13図、第2表)

大村地区は57年度と全く同じ場所である。採集に歩く度に遺物が拾えるということは、それだけ本地区の遺跡が濃密であることを示すものである。まずNo1であるが縄文土器片と須恵器片が採集されている。この周辺からは縄文中・後・晩期の遺物が出土しており、松本平でも數少ない貴重な遺跡といえる。No2も須恵器片が多量に採集されているところであるが、今回も須恵器片を中心に土師器、中近世陶器を採集している。No3、No4は旧国鉄バス車庫東側で図では一つに統くものであるが、表探では地番によって分けて採集しているので表では二つに分けた。No5は本郷高校東側の水田を中心とした地域であるが、土師、須恵器片と共に中近世陶磁器もあった。昨年度調査と合せてみると平安期が中心と思われる。No6は本郷高校の南側畠であるが、昨年度と同様に須恵器片が多い。

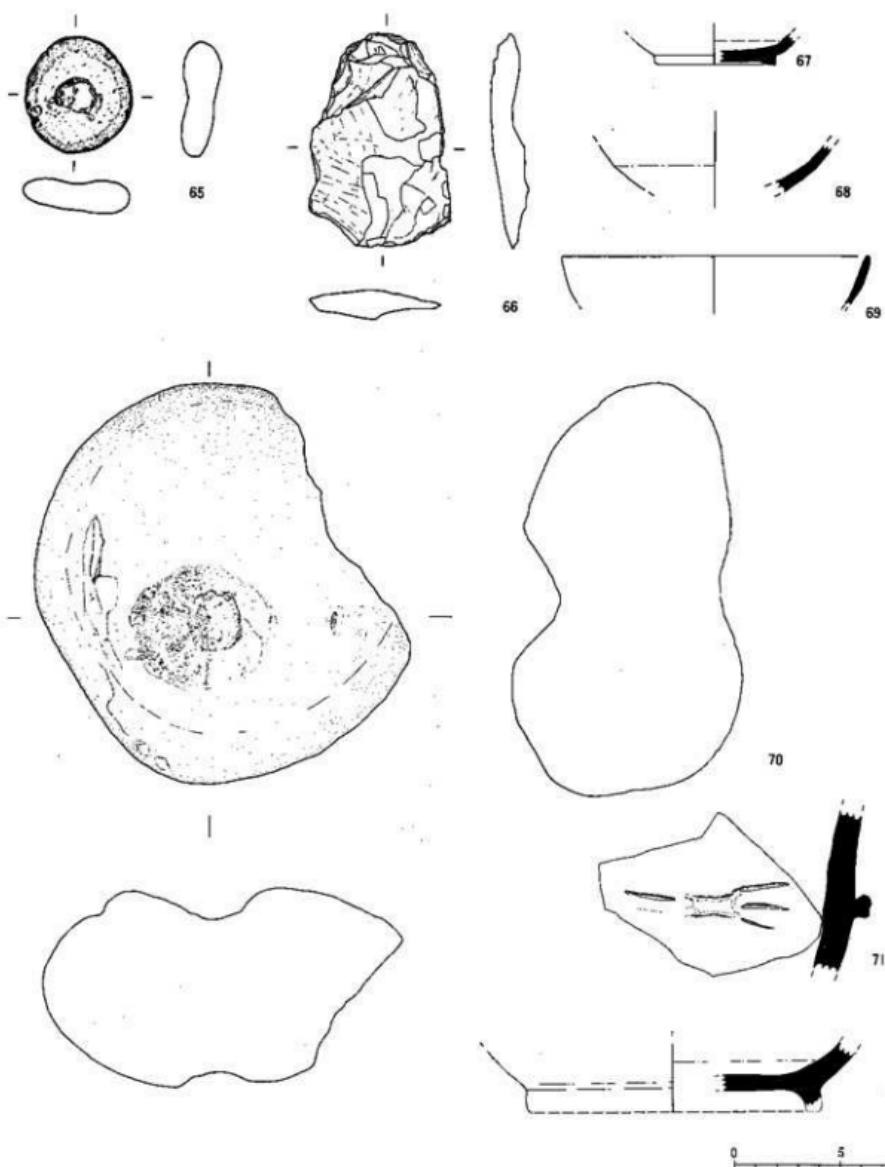
(神沢 昌二郎)



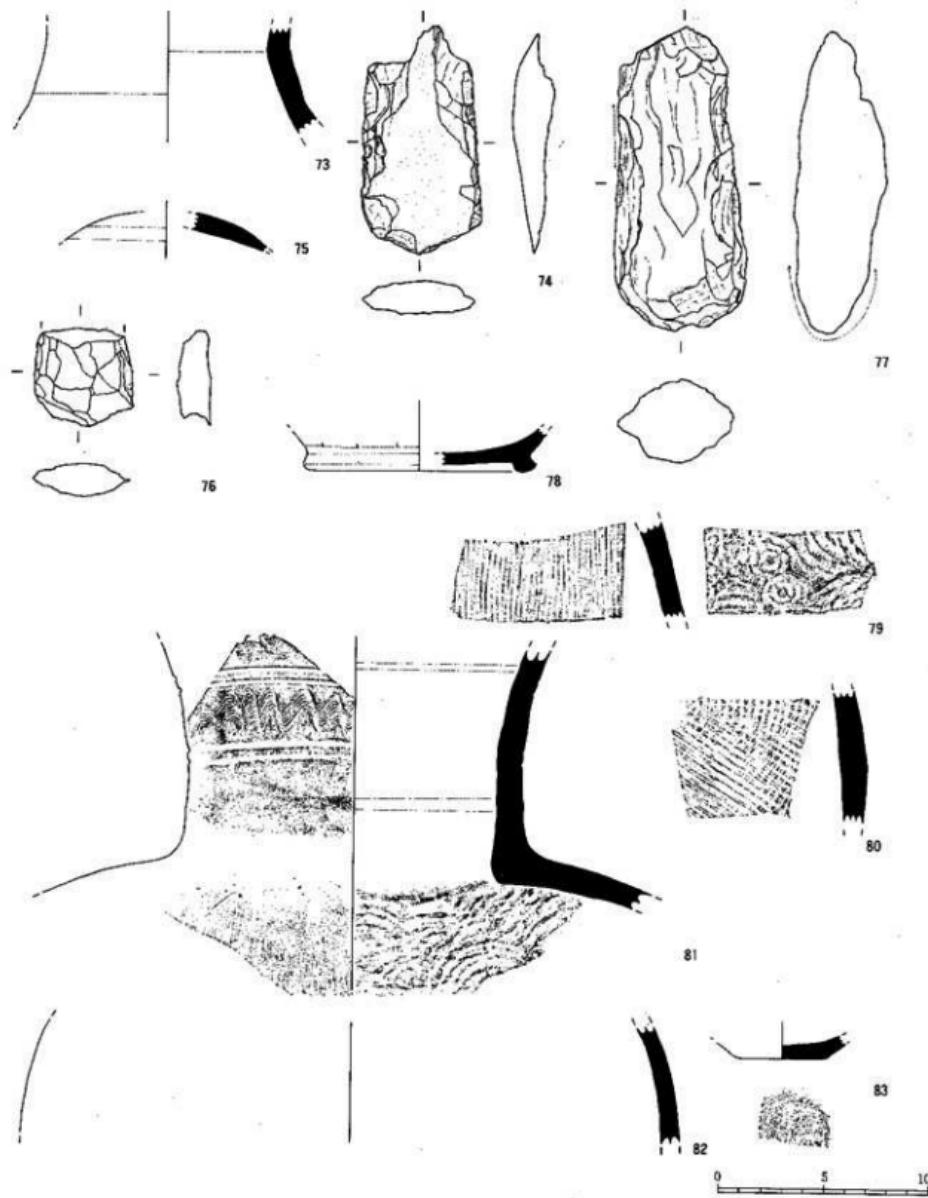
第12図 分布調査（惣社地区）



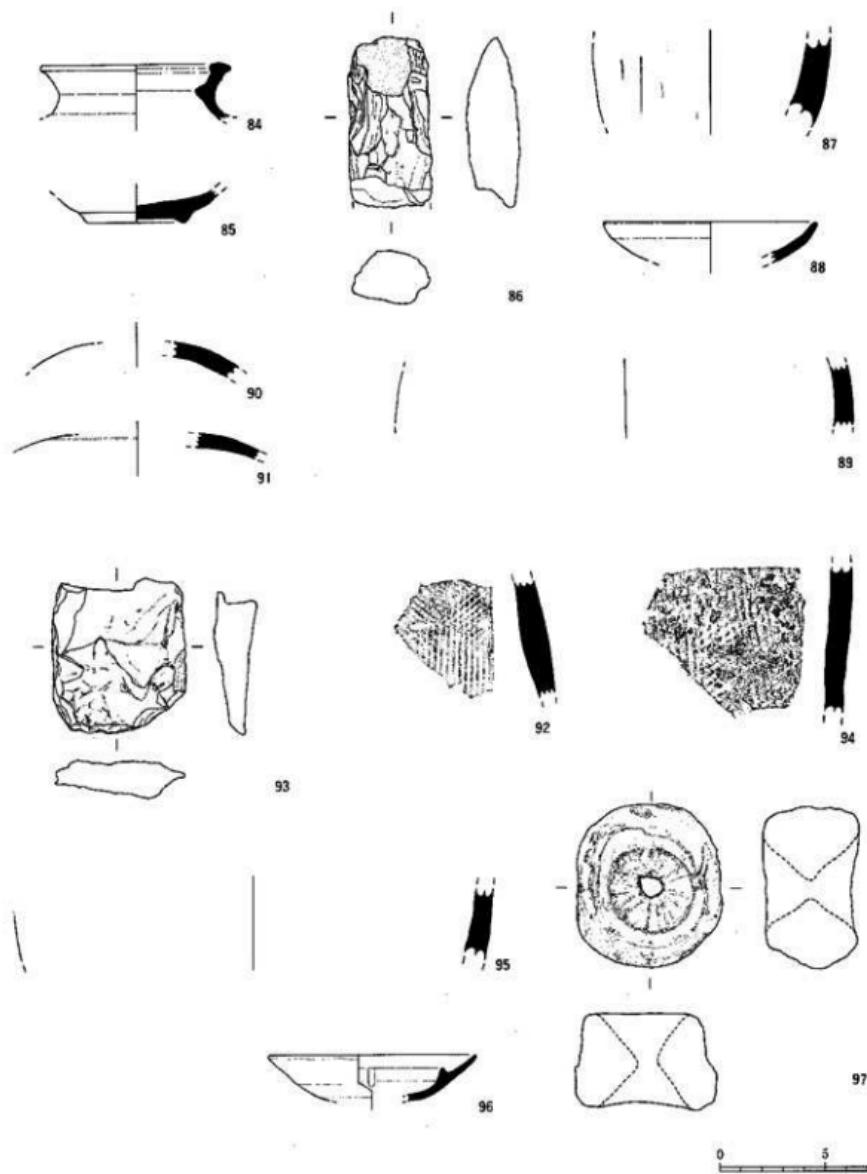
第13図 分布調査（大村地区）



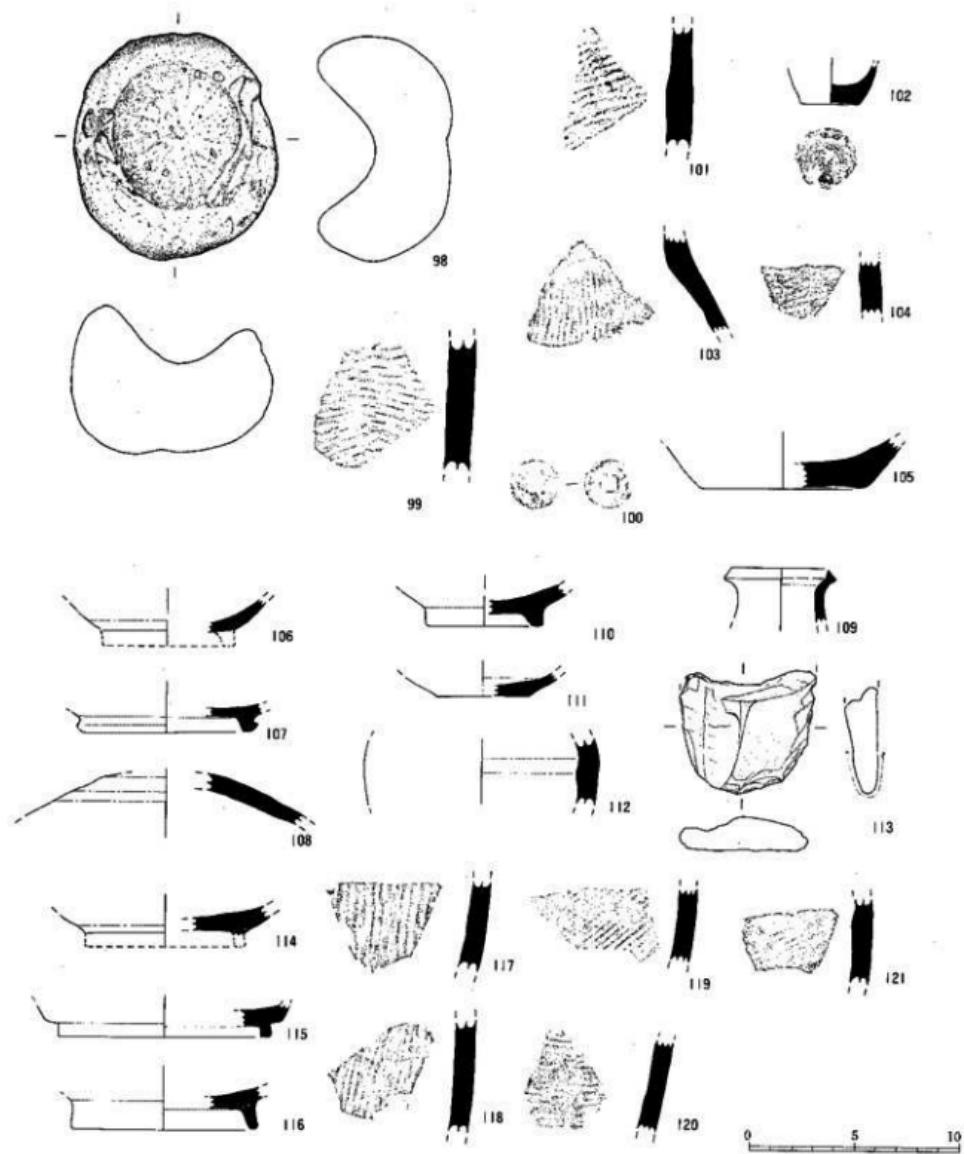
第14図 分布調査採集遺物 (1)



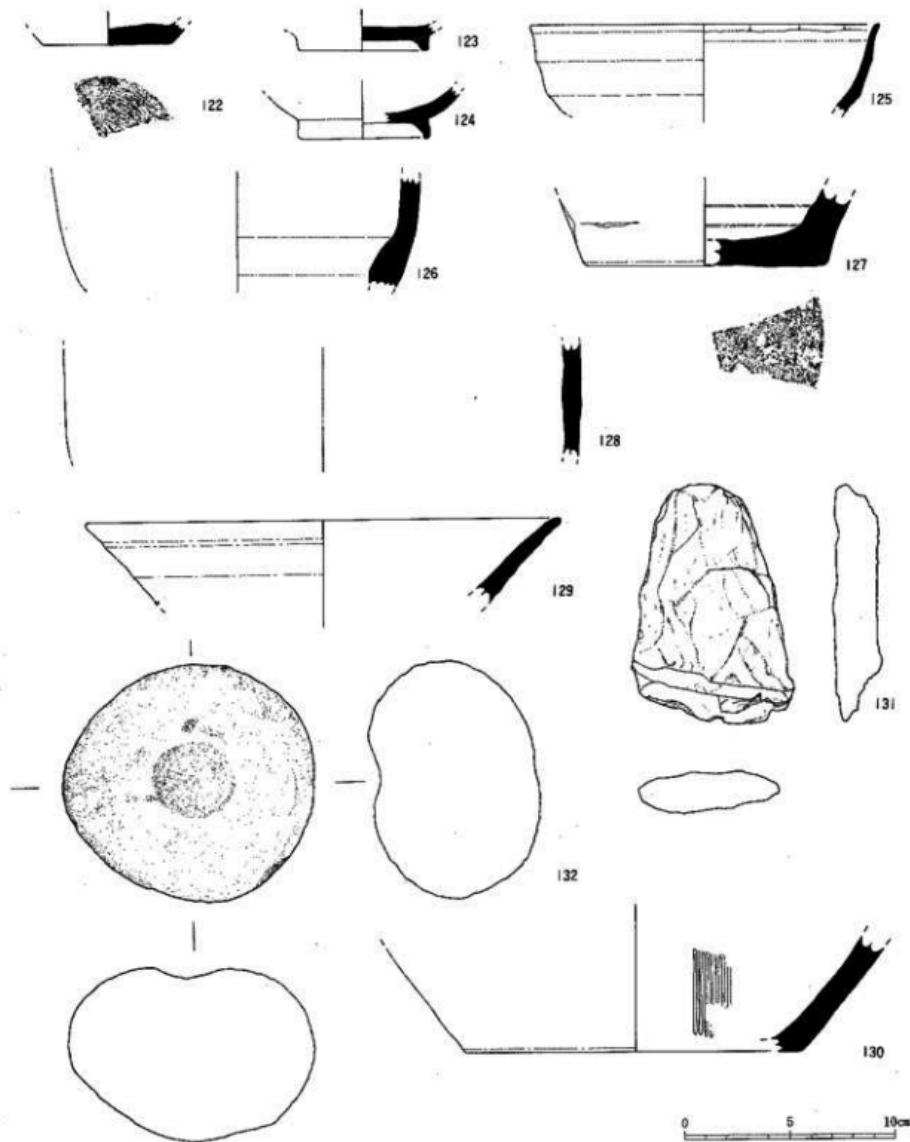
第15図 分布調査採集遺物 (2)



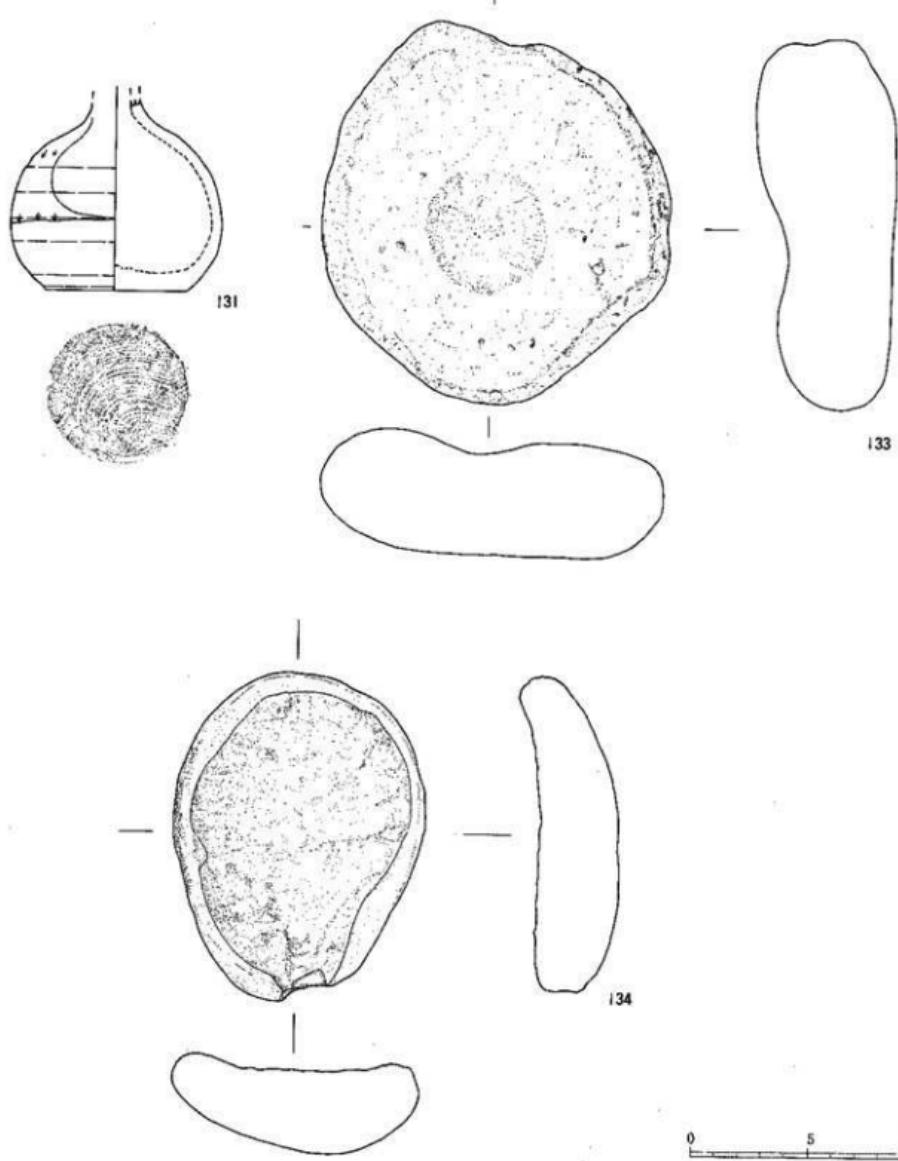
第16図 分布調査採集遺物 (3)



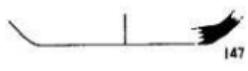
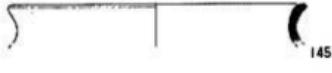
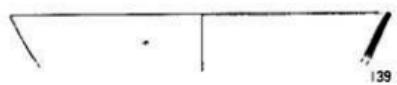
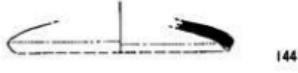
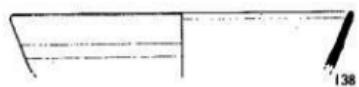
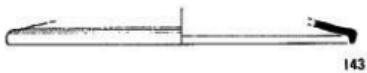
第17図 分布調査採集遺物 (4)



第18図 分布調査採集遺物 (5)

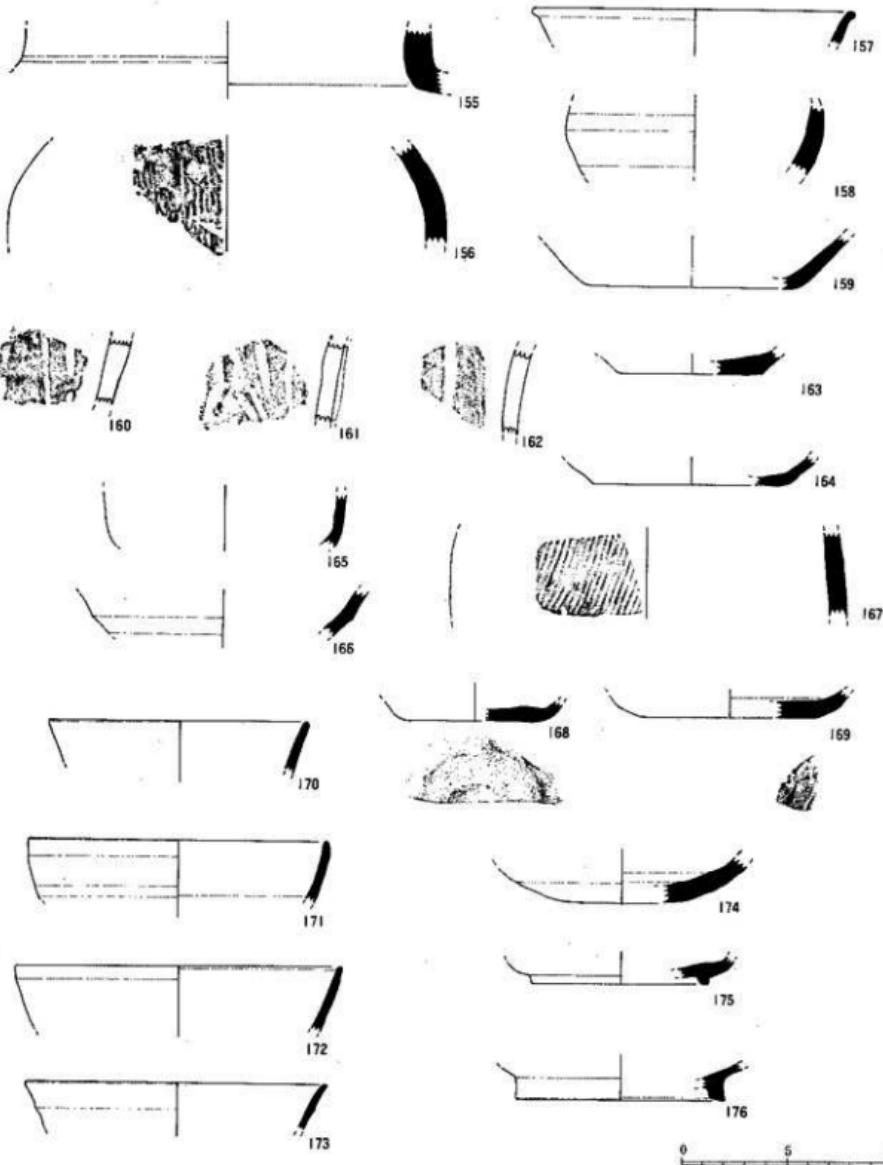


第19図 分布調査採集遺物 (6)

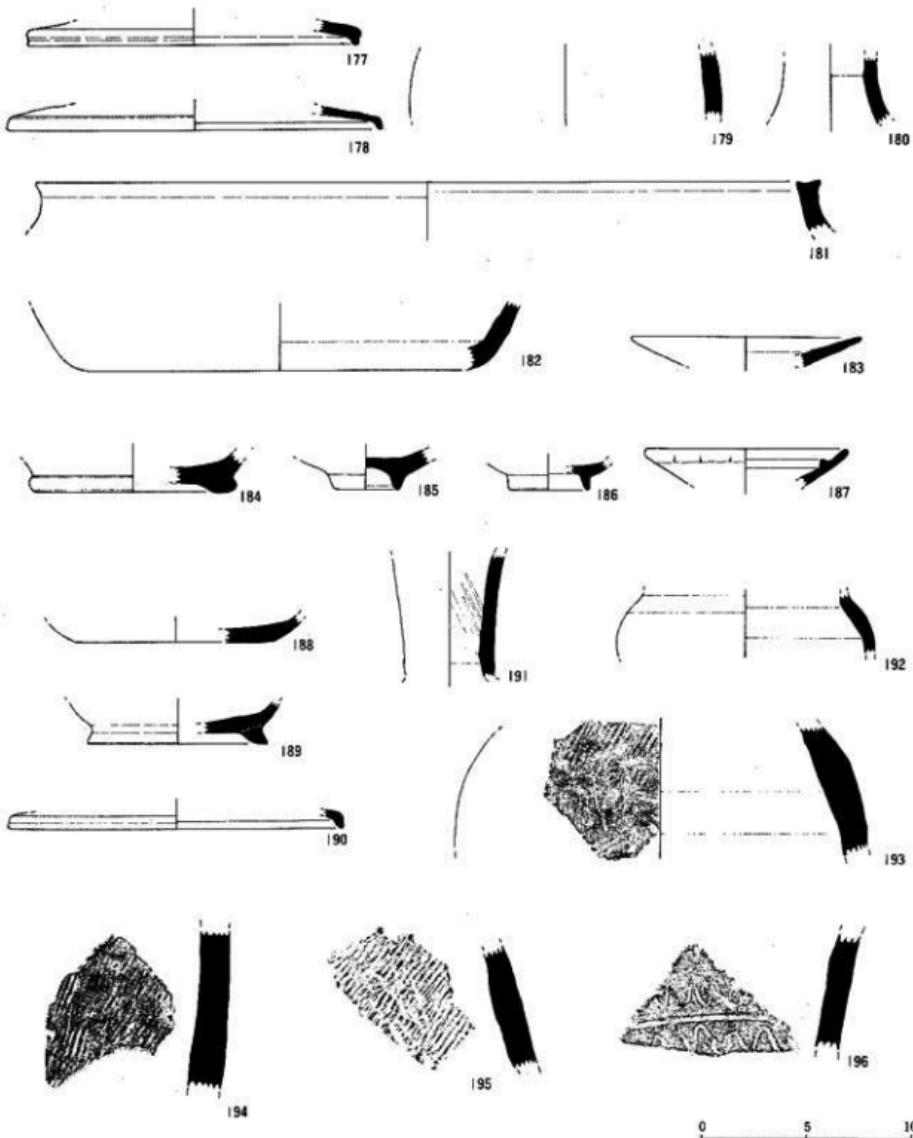


0 5 10cm

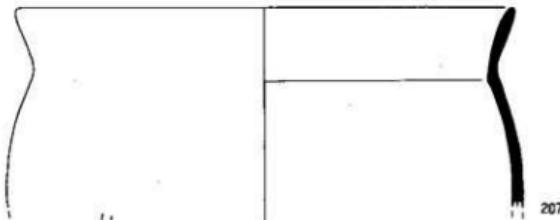
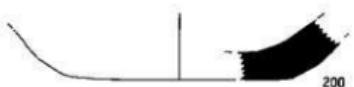
第20図 分布調査採集遺物 (7)



第21図 分布調査採集遺物 (8)

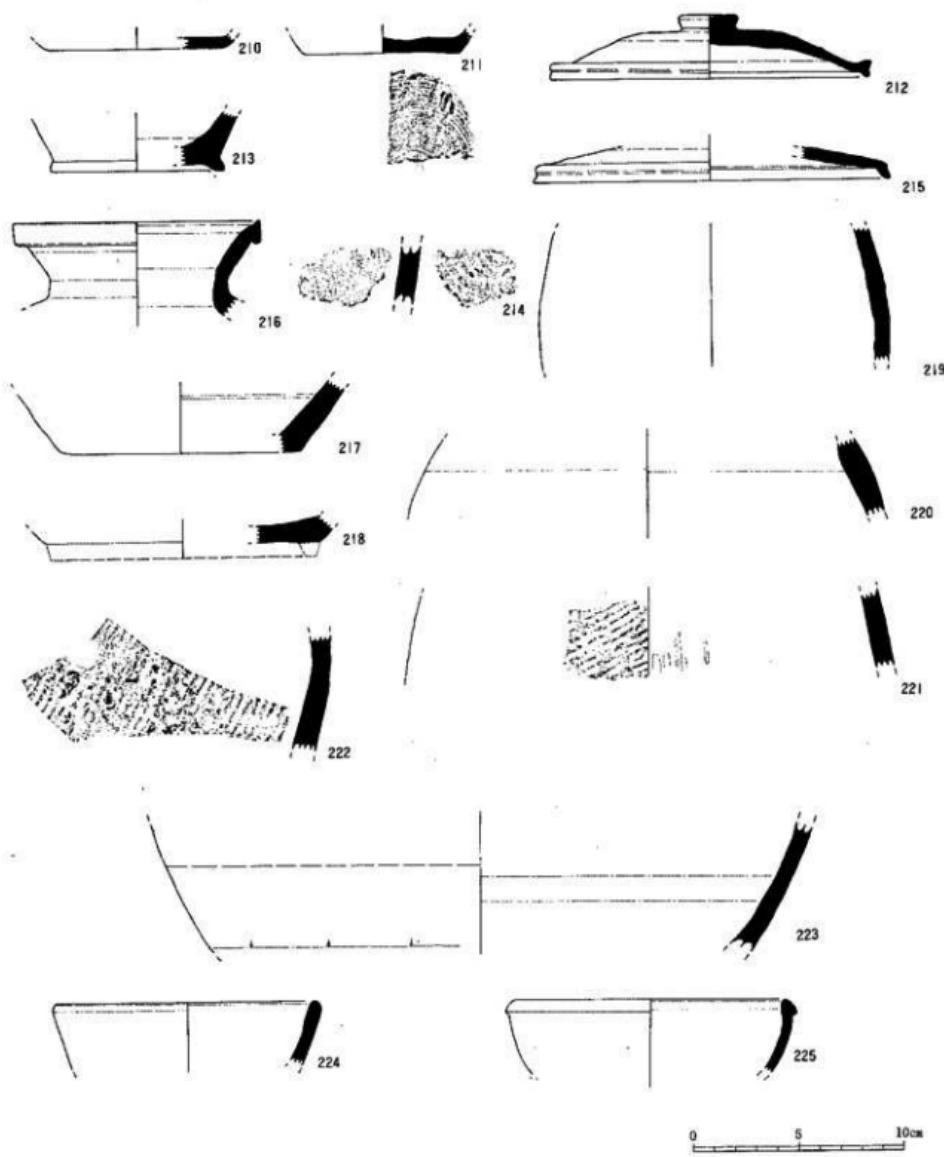


第22図 分布調査採集遺物 (9)



0 5 10cm

第23図 分布調査採集遺物 (10)



第24図 分布調査採集遺物 (11)

第 3 節 古瓦の分布調査

I はじめに

小県郡より筑摩郡への信濃国府移転の時期について、文献史・地名学上から不確実ではあるとしたながら、一応延暦9年(790)前後とした第1次推定国府調査団長倉科明正氏の推定に基づき、信濃国府の位置を推理する一つの方法として、古瓦の分布調査を行う事としたが、奈良時代後期から平安時代前期にかけては、瓦葺き屋根構造に衰退の兆しが見え始める時期で、信濃国府が瓦葺き屋根であったかどうか、移転の時期が下れば下る程瓦葺き屋根の可能性は少なくなる。

このような見地に立って先ず最初に古建築と古瓦との関連を時代的な背景を加えつつ記述したい。奈良時代から鎌倉時代の日本建築の屋根構造は、中国大陆や朝鮮半島から絶間なく流入する新様式を巧みに同化させながら変遷を続けていた。特に朝鮮半島の百済・高句麗・新羅の影響力は強く538年4人の瓦博士 麻奈父好、陽貴文、慶貴文、昔麻帝弥が来日すると蘇我馬子は日本最初の寺院飛鳥寺(中国名法興寺)を建立し屋根は瓦葺きとした。続いて聖德太子は難波に四天王寺を建立し、更に斑鳩寺(法隆寺)を創建し、金堂に軒丸瓦に加えて、軒平瓦にも文様瓦、忍冬唐草文を初めて使用した。以後朝鮮半島の三国の盛衰は、日本の文様瓦に素弁→単弁→複弁⁽¹⁾を根底にしながらも、それぞれ異質の属性を伝えた。丸く優美な百済タイプ、細く荒々しい高句麗タイプ、複雜華麗な新羅タイプがそれである。奈良時代も白鳳・天平期となると、それまで寺院建築だけに限られていた瓦葺きが宮廷建築、九州の太宰府、東北の多賀城、駅舎、正倉等の国・官衙にまでも浸透し、更に聖武天皇の勅願による国分寺・尼寺の造立もあり、瓦葺き建造物・大伽藍が隆盛を極めた。平安時代になると文様瓦にも日本化された繊細かつ簡略化文様が現れ、後期には巴文が使われ始める。仏教文化の面でも真言・天台の密教の影響を受けて、今までの平地仏教に変って山岳地帯に寺院が多く建てられるようになる。奈良時代においての瓦の需要の増大は勢い品質の低下を招き、気候の変化の激しい寒冷地などでは凍傷や凍上現象などによる雨漏り等瓦葺きの弱点が問題になっていた。その点運搬と言う点からも運び易くかつ費用のかからない、又比較的手に入り易い桧皮葺き、柿皮葺きが使用され始め、その上優雅な貴族生活にマッチした寝殿造りと相俟って、瓦葺き建築は用いられなくなってしまった。平安後期から鎌倉時代になると唐風の建築が新しく伝播し、武家の台頭によって鎌倉彫刻に見られるような豪放さが建築様式にも要求され、屋根の勾配も更に急になり、瓦葺き屋根が見直され始める。仏教文化の上でも淨土宗・禪宗・日蓮宗などが武家文化と融合し、瓦葺き氏寺が盛んに建立されるようになった。

以上の古建築と古瓦の因果関係を敲き台として、惣社地区分布調査に引き続き横田調査員と三村は惣社周辺地区において既出古瓦の地点(大村・県・筑摩)および平安時代建立と伝えられて

る海岸寺址（入山辺桐原）神宮寺（浅間温泉）も併せて分布調査を行った。

II 分布調査

調査地区の現状は急速に進行する住宅の密集化、調査不可能な水田、客土に覆われた畠地等と悪条件に阻まれて思うような調査が出来なかった。分布していた瓦類は江戸時代以降の棟瓦（創始延宝2年〔1674〕）のみであった。古瓦既出地点およびその周辺には土師・須恵・灰釉陶器・中近世陶器の散布は濃密である事が確認された。海岸寺址・神宮寺共に既出古瓦の知見はなく、周辺一帯を限なく踏査を行ったがその存在は認められなかった。

III 古瓦の出土した遺跡と地点

（1）大村庵寺址 松本市大村堂田

大村庵寺址のある大村は惣社と浅間温泉に南北から挟まれた南に傾斜する平坦地で、標高は600m、東部に筑摩山脈の支脈である妙義山、玄向寺山を背にし、西側は女鳥羽川に境界される。地区内には遺跡が多く縄文・土師・須恵・灰釉陶器・中近世陶器および瓦が広範囲に分布し、大村神社南大村遺跡（分布調査・大村地区No.1）からは倉科明正氏により製鉄遺構が発見され、鍛羽口、鐵滓が出土している。地区内には第三紀層の良質黒灰色・青灰色粘土が埋蔵されており、古代より現代まで土器・製陶・製瓦が盛んではあったが耐火度が低いのが難点である。1925～1950年までに宮沢亥三男氏により製瓦粘土採取中に堂田地区より、古瓦および大村318番地、現、北野君男氏、小松原道宣氏両家の地下より「来堂」と記された墨書き土器、約7cm大的金箔張りの木鼻が出土し、道路を挟んだ東側の宮沢亥三男氏宅敷地より古建築材、更に南接地より火葬用合せ甕などが発見されている。

学術調査された大村庵寺址の地点は妙義山（古墳）の麓、長野県営野球場南側テニス・コートに接した堂田地籍で、1950、1951、1965、1966年の4回に亘って行われたが、多数の土師・須恵および少量の灰釉・綠釉・磁器・至道元宝（宋、995）、景祐元宝（宋、1034）既出の皇宋通宝（宋、1039）、元豐通宝（宋、1078）と計4枚の古錢他が発見されている。（2）

※A. 古瓦の出土は平瓦・丸瓦（縄目文・布目文・平行線印文）、軒平瓦（唐草・珠文）、軒丸瓦（四葉複弁蓮花文・連珠文）を含めて50点以上が発見されているが、平瓦が主体であり、文様構成により、2セッテに分類され、平・丸瓦では3セッテ目を示唆している。

（2）あがた遺跡 松本市県3-1-2102-4

あがた遺跡のある県地区は薄川の度重なる氾濫によって急速に堆積して出来た扇状地上に在り、惣社からは清水地区を隔てて南西300mに位置し、東部は縄文前・中期、更には1982年の発掘調査で、弥生時代中期初頭の再葬墓が発見され、九州の遠賀川式や東海地方の影響を受けた条痕文土器

いずれも弥生前期に比定される土器を含めて、土師・須恵・灰釉陶器の散布地に隣接し、2~3km先には末期古墳の点在する筑摩山麓が迫っている。南側は臺地小学校に接し、その先には薄川が西流している。標高は600m、北西に僅かに傾斜している。地区内には縄文・弥生・土師・須恵・灰釉陶器の濃密な散布地で、特にあがたの森・蚕糸試験場・県ヶ丘高校周辺は古瓦の散布地と思われる。尚あがたの森と蚕糸試験場には南北100mを距て、県塚1号、2号の古墳と推定されている円墳が相対している。

発掘調査されたあがた遺跡の地点は旧制松本高等学校の裏庭敷地西側部分で、現在はあがたの森公園になっている。東側部分は未調査であるが同校が建設されるまでは、あがたの宮の鎮守地であった事は留意すべき事であろう。1980年の発掘調査によって弥生住居址が2軒発見され、火災にあったと思われる住居址からは、良好なる弥生中期末・百瀬式に比定される甕・台付甕が検出され、石器工房址を思わしめる粒度粗・細の2種類の砂岩砥石と共に多数の未完成磨製石鋸・石包丁・完形磨製ノミ型石斧が一括出土し、更に住居址内には軟質の敲き台・敲き石と思わせる石が置かれていた。平安後期住居址からは、土師・須恵・灰釉・綠釉・模様入り金メッキ鏡子が出土した。(3)

*B、古瓦は、平安後期住居址より丸瓦が1点、焼失弥生住居址覆土より、古式土師と伴出して丸瓦1点が出土した。原嘉藤氏は1955年、明科廃寺址調査概報の中で、あがた遺跡内での布目瓦出土を報告している。あがた遺跡より東300m、松本市県3-7-11、地籍番号筑摩2097番地、小岩井英雄氏宅敷地より平瓦が1点、1970年12月12日フェンス取付け基礎工事中に須恵片を伴って出土した。(現在塩野寿夫氏所蔵)今回の分布調査においても、塩野氏の協力によって現地を踏査した結果、出土地には、土師・須恵・灰釉片の散布が見られた。隣接北側10m、県ヶ丘高校敷地内からも外面叩き目の残っている布目瓦の小破片が発見されている。

IV 長野県立松本工業高等学校遺跡 松本市大字筑摩

松本工業高校遺跡のある筑摩地区は、惣社よりは清水を経て、1.3km薄川の南岸にあり東側は里山に隣接し、1kmで林城山に達する。南側は神田を経て、中山地区に達し、近くには弘法山古墳がある。西側は中林・庄内に隣接し、その先には田川が北西流している。地区内には縄文、弥生中・後期・土師・須恵・灰釉陶器が散布し、東部里山辺地区には古墳が点在している。

発掘調査された松本工業高校の地点は薄川の左岸で、富士電機側の北側で、東方180mには南小松巾上古墳があり、西方200mには筑摩八幡宮が在る。1978、1980年の2回に亘る調査で、弥生・土師・須恵・灰釉が発見されたが、遺構の検出はできなかった。出土した土器は平安期が主体で、若干の弥生中期百瀬式が出土している。(4)既出遺物として宋錢が出土しているが、実見していない。

*C、古瓦は既出遺物として、丸瓦が1点出土している。(現在・山崎治男氏所蔵)

V 遺物

第25図1は1950年大村堂田地籍より製瓦粘土採取中に発見された軒丸瓦（鎧瓦）で、内区と外区とに二分された二重圓文と珠文による文様構成で周縁は中高縁で巾広く1.5cmを計り、頂部は平坦である。外区凹部（花弁部）には珠文11ヶをめぐらし内区中心部には半球形の径2cmの大型の珠文（中房部）を置き周囲に小さな珠文（蓮子或いは花弁部）4ヶを配し、それを区画する様に界隈から4ヶの楔状文（花弁部）が中心部へ平らな面を向けて突き出している。内区内の4分区画は高句麗系の宝相華文(6)の系統を引くものと思われるが、大川清氏は楔状文とその間に配された小珠文を蓮弁の退化したものとして捉えている。いずれにしても平安後期から鎌倉初期に比定されると思われる。瓦当と丸瓦（胴）との接着面が明瞭に瓦当の裏面に残っている。櫛目痕は不明瞭である。技法は平安後期の特長を示す飛鳥様留付けである。色調は瓦当面は淡灰色で裏面接着痕のみ青灰色を呈している。焼成は不良で歎質である。瓦当は17.3×16.3cmで器厚は凸部2.7cm、凹部1.5cmを計った。胴部は欠失している。2は1とセットとして捉えられている軒平瓦（字瓦）で左部分の破片と思われ、上下に2ヶの珠文が棒状施文具で刺突されている。右側には巾広い溝状の施文がやや左に傾斜して付されている。瓦当面及び頸にも平行線の叩文が施され谷部は細布（糸目1cm四方13×13）の布目痕がついている。色調は青灰色を呈し須恵質で固く焼き締まり、1000度以上の焼成と思われる。平瓦の垂れは折り曲げ段頸で平安後期の特長を見せている。長さは5.5cmを計り、器厚は瓦当部1.8cm谷部2.8cmであった。胎土に小石を含む。

大村廃寺址発掘調査で出土した四葉複弁蓮花文軒丸瓦（鎧瓦）、唐草文軒平瓦（字瓦）について実見出来なかったので文献（大村廃寺址調査報告概報）により記述したい。

四葉複弁蓮花文軒丸瓦は中央部分のみの破片で周縁は欠失している。花弁は4葉、中房は大きく蓮子は1+9 蓮弁はきわめて任意に作られたもので正確な分割を実施したものではないと報告されている。花弁は細長く高句麗様式を思わしめる。時期については平安前期に比定されている。同一セッテと見られる唐草文軒平瓦は小破片で唐草文と考えて間違ないとされ現存部分の文様は右から左へ延びるもので、均正・偏行唐草文のいずれかは不明であるが頸や下面に繩目が施され上面に粗い布目痕がある。

図版22の下部は大村堂田地籍318番地より発見されたもので木鼻である。金筋張りでいたみが著しい。木鼻とは肘木・頭貫・虹梁等の横木（水平材）の端や或いは柱等を超えて出た丸に付けた。又は出たように見せた装飾彫刻の事であり型として象・獅子・猿・龍頭及び拳鼻があり、淨土宗・禪宗の系統による大陸系の建築様式で鎌倉以降のものとされている。(6)如来信仰、同地点出土の「来堂」と記された墨書き土器はやはり如来堂と読むのが妥当かと思われる。3は1930年大村堂田より出土したもので、日本民俗資料館に展示されているものであるが、1と同類なので説明は省略する。4は平瓦である。これは県1-7-11小岩井莫雄氏敷地より出土の平瓦で小口の切り方は直角で平安

中期から後期の特長を見せていく。凍傷による剝離痕があり焼成不良が伺えられる。火を受けて酸化（赤褐色）を呈し、器厚は1.5cmで焼成時の青灰色が僅かに散見される。5は松本工業高校敷地より出土の丸瓦で右側の小口が残っている。頭部から尻部へ向かって稍や狭まって行く平安時代の特長が見える。縄目文背部は淡い青灰色、面部は灰褐色を呈し器厚は1.5cmを計る。2、4、5、いずれの布目も1cm四方（6×6）糸目の荒布であるがた遺跡から発掘された2枚の丸瓦も背部縄目文、面の布目文はやはり（6×6）の荒布で器厚も同じ1.5cmであった。火を受けて赤褐色を呈し弥生住居址覆土より出土の右側部分残存の丸瓦は行基式ではないかと報告されたがやはり平安期の松本工業高校出土のものと同類ではないかと思われる。以上いずれの丸・平瓦共に小口（縁）の調整は箇調整であるが粗雑である。布目痕が小口にも見られる処から一枚造りと思われる。

7は松本工業高校敷地より布目丸瓦とともに発見されたいぶし焼き古瓦で両面に籠落書き状のものが見える。厚さは2.2cmで片面灰白色、他面は薄い墨色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。小片の為さだかではないが普通の平瓦ではないと思われる。

VI まとめ

今回の古瓦分布調査の結果については以上記述したとおりであるが、古建築発見の一つの目安となる古瓦の分布について先ず慈社地区に絞って見ると未だに古瓦の短見がない。一方あがた地区はあがたの森・県ヶ丘高校周辺約300mの範囲内に平安中期から後期に比定されると思われる丸瓦・平瓦が5点余散在している。未だに文様瓦、軒丸瓦（鎧瓦）、軒平瓦（宇瓦）の出土を見ないので時代判別は甚だ漠然とはしているが、一応この地区内に古建築址の存在が伺えるのではないだろうか。薄川南岸の松本工業高校敷地内出土の丸瓦については県地区とは余りにも遠隔地にある点、或いは松本市神田自性院の礎石との関連性も考えなければならないかも知れない。大村庵寺址については同じ堂田地籍出土の口來堂と読みとれる墨書き器と鎌倉時代初現の木鼻及び東側宮沢亥三男氏宅敷地より出土の古建築材（現日本民俗資料館展示）、更に周辺出土の火葬用合せ甕、点在する焼けた大石、堂田、寺田地籍には広範囲に涉って古建築址の埋没が想定される。又、宮沢亥三男氏によれば粘土採取中に木の皮が一面に敷かれるように埋没しているのを発見しているとの事、桧皮甕・柿皮甕建築址の存在が推定される。大村庵寺址の存続年代については、四葉複弁蓮花文軒丸瓦・唐草文軒平瓦のセットを一応平安前期として連珠文軒丸瓦、珠文軒平瓦のセットを平安後期から鎌倉時代と比定し、出土古錢、土師、須恵、陶・磁器、木鼻等総合的に見て平安前期から鎌倉時代と思われる。かつて大川清氏は大村庵寺址出土の古瓦について古瓦の造瓦地を、松本市岡田田溝古窯址及び大村妙義山南麓古窯址に求め得ると示唆したが、ちなみに妙義山南麓第1号古窯址から須恵器片と布目瓦が出土し岡田大口沢菖蒲平第3号古窯址からも発見され更に岡田田溝中の沢第8号古窯址からは玉縁つき有段丸瓦1点を含めて平瓦38点が焚口及び煙出し付近から出土。共に布目と印文で大

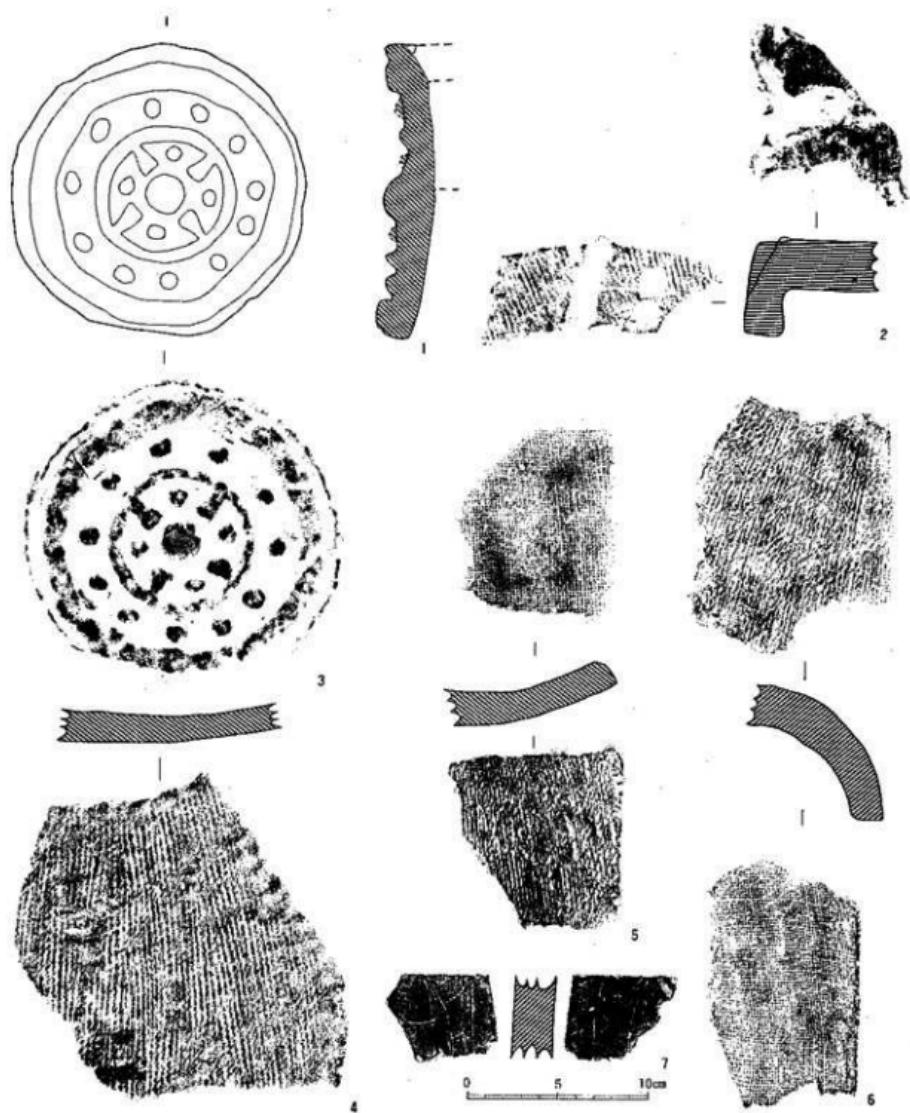
村庵寺址出土の平瓦、及びあがた・筑摩地区出土の丸・平瓦との類似点は前者は叩文、後者は一枚造り技法に見られるのみである。又時期的に見れば、田溝第8号古窯址の出土土器は猿投黒笛40号、折戸10号に相当すると云われ平安中期（9世紀）に比定される（7）ので問題はないのだけれど、比較検討するには余りにも資料が少な過ぎる嫌いがある。今後の資料の新発見にまつ他はない。また岡田田溝古窯址の分布調査も必要と思われる。尚、妙義山南麓古窯址周辺を幾度か踏査を行ったが近世陶器と19世紀と思われるトチンの出土を見たのみであった。松本平に於ける瓦の凍傷の問題については相当深刻で昭和30年松本城修復時の屋根瓦仕様書によると焼成は1100度以上、吸水率は15%以内、24時間-20度に放置して凍傷なきものとしている。ちなみに松本城屋根坪数約450坪解体総数量は80699枚であったと報告されている。（8）

以上今回の古瓦の分布調査に於いて非力の為推定国府に一步も近づく事は出来なかったけれども、ここに調査に御指導、御協力を頂いた日本民俗資料館、窪田雅之氏、大村 宮沢亥三男氏、里山辺北小松 塩野寿夫氏、里山辺禿川寺 山崎治男氏、入山辺桐原 山内勝氏の各氏に対し深い敬意を表す次第であります。

（三村葦）

参考文献

- (1)瓦と屋根構造 佐藤滋朗 学芸出版社
- (2)長野県東筑摩郡本郷村庵寺跡調査報告 信濃19巻第10号
- (3)あがた遺跡 松本市教育委員会 1981.3
- (4)長野県立松本工業高等学校遺跡 松本市教育委員会 1979. 3
- (5)図鑑瓦屋根 坪井利弘・理工学社
- (6)古建築の細部意匠 近藤豊・大河出版社
- (7)東筑・松本・塙尻市誌（第2巻歴史上）
- (8)松本城 松本市教育委員会



第25圖 古 瓦

結び

発掘調査 二軒の平安時代末期と思われる住居址を検出した。遺構が浅く住居址の上部が削平されていたためか、二軒とも遺物は少量で、完形は土師器壊1点のみで、土師器、灰釉陶器とともに壊類が主で甕類が一点も存在していない。鎌倉時代に入ると煮沸用具として内耳壺が現われるが、その不検出は鎌倉以前を示す。カマドは二軒とも焼土を残すのみで大きさがはっきりしないが、第1号住居址が西側やや北寄り、第2号住居址が東南隅にあたる。溝状遺構は東側が未調査のため具体的に言えないが、形状だけでみれば方形にめぐら溝であり、溝に囲まれた内部に何らかの遺構の存在を期待したが、結果は既述のとおり20本近くの小ピットがあったにすぎない。溝は僅かに東より西へと傾いており、実際に水を通せば流れるが全幅でないのでわからない。ただ溝の廃棄までに若干の時代を感じ、ある期間溝としての存在が続いたことを思わせる。廃棄の時期は礫と共に混入している土器片で推定して本文に示したが、この地周辺が繩文時代から中世まで量の多寡の差こそあれ続いているので、この地の再利用の際不便、不用となった為であろう。

本年度調査も礫群が出たがその全貌を知るまでは遺構としての意味を持たせずに置きたい。前述の二軒の住居址も河川の自然堆積の凹凸のある砂礫層の上につくられており、薄川の氾濫原であることは確実である。今後の継続調査によって次第に判明されるものと信じている。これらの遺構は即国府に関わるものではないが、平安、鎌倉時代に存在したとする国府の時期に合致することは確かである。

分布調査 惣社地区をくまなく歩いたが遺物の濃密に採集された場所はやはりこの発掘地点周辺であった。しかし表採という条件を忘れてはいけない。つまり耕作の為の天地がえしや深耕によって遺物が地上にあらわれやすいからである。また同一面積における遺物量の比較など、少ない資料を活用して何らかの手掛りを得たいものとは思っている。

今回は等高線についてあたってみたが、610mラインの伊和神社東側の南北道路の両側の集落よりの遺物採集が目立った。この道は伊和神社からみて750m北上しほぼ直角に東に向い600mで湯の原の南北道路に出る。木下良先生のご研究の中では前述の道を西及び北の境と考え、東は湯の原の道で囲まれる範囲を国府域と考えられておられるが、いずれにしても伊和神社東側の道路を大事にみてゆきたい。

他方では古瓦の分布についても調べてみた。その結果は本文詳述のとおりであるが、松本市内における古瓦の出土例は少なく、大きくみると大村廃寺址周辺、県遺跡周辺となる。当時は瓦の使用が少なくなったというが、官衙、社寺の存在を知る上では瓦は重要であるのでその点更に資料の増

加を期待したい。

以上調査に基づいて記してみたが、最近の松本市内の発掘状況から二三考えてみたい。

現在松本市内では中央道長野線建設に先立つ県営は堀整備事業が続いている、その為緊急発掘調査が続いている。その結果今まで未調査であった奈良井川左岸の松本市西部地域の古代の様子が解明されつつある。

本年度行った神林地区の下神・町神遺跡では平安時代の住居址80軒、建物址36軒他を検出し、主要遺物は住居址内より奈良三彩小壺を、覆土より佐波理鏡と思われる口縁部破片を出土しており、下神・町神遺跡より北1.5kmに鎮川を渡った島立地区的南栗遺跡では奈良平安時代の住居址15軒、建物址2軒。中世の住居址5軒等が検出され、完形の佐波理鏡1点の他に青銅器4点が出土している。このことは奈良井川左岸では平安時代に入って爆発的ともいえる急速な開発がなされたことを示すものであると共に、権力を有する者の存在や社寺との関係なども伺わせるものであり、併せて古代の道についても示唆するものである。それは信濃国府の存在にも関わることであり、今後更に調査が進めば外側より国府解明の手がかりが得られるのではないかと期待している。

最後になったが今回の調査では多くの方々のご理解、ご指導、ご協力をいただいた。特に蚕糸試験場には昨年に引き続いで用地発掘をご快諾いただいた。厚く御礼申し上げる。また本郷地区、とりわけ惣社町会、公民館には町民への衆知、公民館使用などの他作業員の勧誘等目に見えないところでご協力をいただいた。またご指導いただいた木下先生、山中先生、桐原先生はじめ調査にたずさわった調査員、作業員の方々、整理作業と報告書づくりにご協力いただいた多くの方々に心から御礼申し上げ、今後の調査にもご指導、ご協力をお願いするものである。（神沢 昌二郎）

表1 発掘出土遺物集計表

(重量単位 g)

出 土 地 点	土 節 器		須 恵 器		灰 軸 陶 器		中 近 世 陶 器		そ の 他		合 計	
	数 量	重 量	数 量	重 量	数 量	重 量	数 量	重 量	数 量	重 量	数 量	重 量
第 1 号 住 居 址	49	413.4	3	19.4	4	32.0	1	6.0			57	470.8
第 1 号 住 居 址 検 出 面	2	18.9			4	25.0	2	6.5			8	50.4
第 2 号 住 居 址	5	43.2			2	152.6			縄文 2	20.8	9	216.6
検 出 面	20	97.5	3	118.5	2	7.1	11	43.8			36	266.9
A グリット(第1住東北側)	6	62.6	2	64.1	4	36.4	2	3.9			14	167.0
B ハ (ハ)	2	3.5			1	3.7	2	19.9			5	27.1
C ハ (ハ)	20	80.2			2	5.4					22	86.6
D ハ (ハ)	6	24.0			1	39.7	1	13.7	石板 1	12.8	9	90.2
溝 状 遺 構	105	287.5	1	162.0	9	82.9	5	226.7	羽ガマ 1 ツイゴの口 7	11.6 27.6	127	798.3
南 グ リ ッ ト 東	12	23.4			1	6.5	9	63.1			22	93.0
砾 群	2	16.1	6	76.8	8	49.1	8	200.3			24	342.3
発 掘 地 点 表 採	23	132.1									23	132.1
合 計	252	1202.4	15	440.8	38	440.4	41	583.9	11	72.8	357	2740.3

表2 分布調査採集遺物集計表

(重量単位 g)

調査地 悠社地区			土 筋 銅				須 惠 鎌				灰 磷 陶 器				中・近世 陶 器				その他の								
No.	地番	地目	环	壹	壺	不明	重 量	环	碗	壹	壺	其他	重 量	环	磷	壹	壺	不明	重 量	环	壹	壺	鉢	其他	不明	重 量	
1	511-2	畠																		4	1		1		4	96.75	石器 64.9
2	520	畠		1			28															1				5.35	
3	521-2	畠																									
4	528-2	畠															1		13.3	1	1					92.5	
5	526-1	果樹園							1				6.6									1					
6	530-1	畠		2			13.75													1	76.55	2		1	2	216.9	石器 4100
7	585-1	畠																									
8	550-5	畠																									
9	552	空地														1		3.45									
10	553-8	果樹園		1																							
11	442-2	宅地							1			30.25															
12	71-8	果樹園																									
13	418 416-1 437-1 438-1	果樹園	1	1			7.5	1				16.2									天目鏡 2			7	37.2		
14	436-2	空地		1	1		1.25																				
15	78-81	果樹園																		1					32.95		
16	82	果樹園		1																							
17	83.84	果樹園		1																							
18																											
19	91.92.93.94-1	畠、田																	2					2	51.5		
20	95-100	畠、田																									
21	45 口号	果樹園																	1						4.6		

表 2 分布調查採集遺物集計表

(重量单位 g)

調査地 惣社地区		土 部 器			須 念 器					災 物 勘 器			中・近世 勘 器						その他		
No	地番	地目	环	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺	壺
22	11.19	畠、田																1	1	6	80.5
23	54.56	果樹園																			
24	392-2	畠					1		23.6										1	4	36.5
25	408-2 411 412	畠																1	1	フタ	1
26	452-3	宅地他					2		149.35												116.5
27	460	果樹園															1	1	3	黒	1
28	463-1 464	果樹園	1		13.5																
29	465-3 ~5	畠								1		12.5							1	4	29.7
30	471-1	果樹園																	1		4.6
31	477-1 478-1 479-1 480-4	果樹園																	6	30.5	純文片 11.5
32	535-2 535-3	畠																			
33	481-1 481-4	畠																1		2	50.75
34	495-1 496-1 491-1.2 492	田																			
35	487-1 487-4	畠																			
36	472-1	宅地	1	6.95		1	2		76.4												
37	406	果樹園					1		68.9			1	24.4						5	12.35	
38	402 404 405 407 408-1	畠	1	11.55								1	6.05	2	光明日 1				12	119.5	
39	397 398-1.2 399-1	果樹園																	1	24.0	
40	372	畠					1		8.17			1	3		2	フタ	1	8	145.84		

表2 分布調査採集遺物集計表

(重量単位 g)

調査地 惣社地区			土 葵 器					須 恵 器					灰 粉 陶 器					中・近 世 陶 器					その他の				
No.	地番	地目	环	甕	罐	不明	重 量	环	甕	罐	壺	坏	环	甕	壺	不明	重 量	甕	罐	擂钵	皿	鉢	他科	その他	不明	重 量	
41	377-1	畠																		灯明座	1				10.67		
42	361-1																									大村氏宅	
43	362 364 ~366 367-1	畠																2	1	1					35.65		
44	1-1																										
45	369-2																									石器 263.7 841.0	
46	352-2	畠																									
47	356 354-1	畠、田																									
48	337 338-1 339-1.2 340-1	畠、田																									
49	344-1 345-1 346 347-1	果樹園 田						1			61.35																
50	282 283-1 284 285 286-1	田																2					1	18.1			
51	349 276-1	畠																									
52	1039 1048-1 1049 1050	畠																					3	5.15			
53	43	畠、田																									
54	133 ~136	畠																		1					10.85		
55	1002~1004 1006 1008	果樹園																1							6.95		
56	1005 63	畠																									
57	104-1	畠							1		26.0							2			2		2	36.0			

表2 分布調査採集遺物集計表

(度量單位 公尺)

表 2 分布調查採集遺物集計表

(重量单位 克)

(管理單位 家)

調査地 大村地区			土 器					須 梁 瓦					灰 砂 瓦					中 · 近 世 瓦					その他の				
No.	名 称	地 目	坏	縫	甌	不 明	重 量	坏	縫	甌	不 明	重 量	坏	縫	甌	不 明	重 量	坏	縫	甌	不 明	重 量	坏	縫	甌	不 明	重 量
1	大村遺跡	烟					3		2			55.5															縄文159.2
2	大村神社北	烟	高环 I	10	3	90.5	18	1	31	4		210.5						2		灯明 皿1			4			47.5	
3	旧国鉄車庫東	烟	9	6		133.7	25	1	18	7		501.3	1				4.6						1	1		38.1	
4	* 東南	烟	2	2		38.5	9	3	16	2		357.7	1				3.1	2	1				1	2		132.2	
5	本期高塚東	水田、烟	1	1		3.8	3	1	8	3		148.3					4	3	1	灯明 皿2			9			52.1	
6	* 南	烟	2	7	10	165.2	22	4	15		3	712.6						3	1				2	2	120.1	打斧 2 225.3	

表3 土器觀察表

通 号 No.	目 次 No.	種 類 類別	器種	保存部位	寸 法				成形方法・器形の特徴	色 調			施 土 ・ 燒 成	出土地点・その他の 記述	
					口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)	厚 さ (mm)		外 面	内 面	断 面			
					口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)	厚 さ (mm)		口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)			
7	1 15	土 器	杯	1/5	17.9	2.3	1.7	—	コトロ(内外張)・舟切底・内黒土器	にじい模	灰	にじい模	焼粒合	良	1住Na.1
	2 13	土 器	杯	光形	8.5	3.5	1.5	—	コトロ・舟切底・溝文状成形	高	茶	高	3mm程度の粒子合	良	1住Na.8
	3 13	土 器	杯	底	—	6.8	—	—	コトロ・舟切底・内面中央にくぼみ	茶	茶	茶	焼粒合	良	1住覆土
	4	土 器	杯	口縁	(9.7)	—	—	—	コトロ	うす茶	うす茶一船底	ねずみ	灰 微	良	1住Na.1P±1住Na.5
	5	土 器	杯	口縁	(11.0)	—	—	—	コトロ	うすこげ茶	うすこげ茶	うすこげ茶	微粒子多くぐらつく	良	*
	6	土 器	杯	口縁	(12.1)	—	—	—	コトロ	うす茶	うす茶	うす茶	焼粒子合	良	1住Na.1P±1住内
	7	土 器	杯	底	—	6.7	—	—	コトロ	赤 茶	赤 茶	茶	良	良	1住Na.3
	8	灰陶器	杯	底	—	7.6	—	—	コトロ・つけ高台	灰 白	灰 白	灰 白	焼 密	堅 細	1住Na.1P±1住内Na.6
	9	土 器	杯	1/6	(9.0)	(3.6)	1.5	—	コトロ(内外張)・舟切底・内黒土器	うす茶	うす茶一船底	うす茶	焼粒合	良	1住Na.1
	10	土 器	—	底	—	(6.5)	—	—	コトロ・舟切底・器形不規	灰	灰	灰	良	1住Na.1	1住Na.1
	11	土 器	杯	底	—	(6.1)	—	—	コトロ・舟切底	ウス茶(にじい模)	ウス茶	ウス茶	良	良	1住斜面
	12	土 器	杯	底	—	(8.8)	—	—	コトロ・内面コトロ・舟切底	ウス茶	高 灰	ウス茶	良	良	1住Na.12
	13	石 皿	碗	口縁	(21.0)	—	—	—	コトロ・内面端・山系統のもの	灰 白	ウス茶	灰 白	良	1住Na.1P±1住Na.14	1住内
	14	灰陶器	—	—	—	—	—	—	田舎ヘタけずり・内面コトロ	ウス灰	灰 白	灰 白	堅 細	堅 細	1住Na.11
	15	灰陶器	杯	底	—	(7.4)	—	—	田舎ヘタけずり・舟切底放状・つけ高台 放状田舎ヘタけずり・内面窓あるとあり・輪かけ5回位	灰 白	灰 白	灰 白	小白粒合	堅 細	2住Na.10
	16	灰陶器	壺	網	—	—	—	—	田舎ヘタけずり・内面コトロ・外面部	森 灰	灰 白	灰 白	焼 密	堅 細	2住Na.9
	17	土 器	高杯	底	—	—	—	—	コトロ・小底を作って脚部はりつけ	黄 茶	茶	茶	良	良	1ゾ内
	21	土 器	杯	口縁	(9.3)	—	—	—	コトロ	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良	良	南側ミゾ内
	22	土 器	杯	1/6	(11.1)	—	(2.1)	—	コトロ・外周擦耗	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良	良	1ゾNa.1
	23	土 器	壺?	底	—	(6.4)	—	—	コトロ・舟切底・へらなで	ウス茶	ウス茶	茶	小粒合	良	1ゾNa.4
	24	器物向器	杯	口縁	(13.4)	—	—	—	コトロ・器物のみで斜落	黄灰	質 線	口	灰	堅 細	1ゾ内
	25	灰陶器	杯	底	—	(6.7)	—	—	田舎ヘタけずり・つけ高台	灰 白	灰 白	灰 白	焼 密	堅 細	1ゾNa.8
	26	灰陶器	杯	底	—	(5.2)	—	—	コトロ・田舎ヘタけずり・つけ高台	灰 白	灰 白	灰 白	焼 密	堅 細	南側ミゾ
	27	灰陶器	壺?	網	—	—	—	—	コトロ	灰 白	灰 白	灰 白	焼 密	堅 細	1ゾNa.1
	28	灰陶器	—	—	—	—	—	—	コトロ	灰 白	灰 白	灰 白	焼 密	堅 細	南側ミゾ
	29	灰 釜	碗	口縁	(15.4)	—	—	—	コトロ・内外偏にうすい脚・買入あり	オーラー灰	オーラー灰	オーラー灰	良	良	1ゾNa.5
	30	灰 釜	碗	口縁	(17.0)	—	—	—	コトロ・内偏18㌢ほどより脚が太く足元にてに膨れ 内面には施釉あり・背面に難焼	オーラー灰	オーラー灰	灰	小粒子あり	堅 細	1ゾNa.5
	31	土師質土器	高盆	網	—	—	—	—	コトロ・弓字脚三色化	灰茶一黒茶	灰 茶	灰 茶	焼 密	良	1ゾNa.1
	32	陶 器	盤	口縁	(26.0)	—	—	—	楕円	にじい模	高 灰	良	堅 細	—	—
	37	陶 器	泡メソコ	—	—	—	—	壓印し・文様不規・縫ね色の色をつけている	ねずみ	灰 白	灰 白	焼 密	堅 細	1ゾ西側	—
	38	土 器	羽口	—	—	—	—	—	—	灰	灰	茶	良	良	1ゾNa.2

発 見 地 点 No.	組 合	種 別	器種	残存部位	寸 法	成形方法・器形の特徴	色 調			砂 土・表 示	出土地点・その他の 情報			
							外 面	内 面	底 面					
7 39	上 部	环	口盤	(14.7)	—	クロコ・へらけ目り・内やろ	ウス黒	黒	ウス黒	小粒食	良	南グリット束		
40	土 面	环	底	—	(6.4)	—	クロコ・底切底	茶	ウスニギ茶	ウスニギ茶	良	良	南集石No.3	
41	土 面	环	底	—	(6.0)	—	クロコ・底切底	茶(茶)	浅	浅	良	良	南集石No.2	
42	土 面	高环	腹	—	—	クロコ・外唇をつくりてより脚窓をつける	赤 茶	赤 茶	赤 茶	良	精 良	検出面		
43 13	土 面	环	底	—	(4.4)	—	クロコ・底切底	ウス黒	ウス黒	ウス黒	良	精 良	2 検出面	
44	土 面	环	底	—	(7.5)	—	クロコ・内ぐら	赤 茶	赤 茶	赤 茶	良	良	—	
45 15	底座部	底	—	(9.4)	—	底部唇輪へ切り、底内面小豊形高台欠損	灰 白	ウス青灰	灰 白	小粒食	良	—	検出面	
46	灰陶陶器	碗	口盤	(9.3)	—	クロコ・外周に透明隙かかる	灰 白	系灰白	灰 白	織 密	堅 硬	—	南グリット束	
47	灰陶陶器	环	口盤	(10.5)	—	クロコ・内面・外側・上部唇	灰 白	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	—	検出面	
48 15	灰陶陶器	环	底	—	(8.7)	—	クロコ・底切底へ切り・つけ高台	灰 白	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	—	—
49 15	灰陶陶器	环	柄	—	—	クロコ・輪つけかけ	灰 白	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	—	南集石	
50	唇 部	碗	柄	—	—	縫にけずりあり、尻縁脚缺くかかる。寄盤・	灰 緑	灰 緑	灰 緑	織 密	堅 硬	—	—	
51 14	唇 部	碗	口盤	(7.3)	—	縫は吹きつけ	白・藍	白・藍	白	織 密	堅 硬	2 住吉山面	—	
52	唇 部	碗	底	—	(9.5)	—	底へり切り・周面輪	ウス灰綠	灰 白	織 密	堅 硬	—	南G東	
53	灰陶陶器	底	肩	—	—	升脚へけ目り・内面クロコ・脚がけ	ウス灰綠	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	D	—	
54	土 面	环	口盤	(9.6)	—	—	茶	白 茶	茶	良	良	—	検出面	
55	上 部	环	口盤	(16.6)	—	—	根	根	根	魚	良	—	—	
56	土 面	环	底	—	(6.1)	—	クロコ・つけ高台	茶 黒	茶 黒	7mm大小の小石含	良	—	—	
57 15	土 面	环	底	—	—	クロコ・内面周輪あり	茶	茶	茶	良	—	—	—	
58 15	栗毛器	碗	口盤	(16.8)	—	内外面クロコ・豊形	灰 黑	灰 黑	灰 黑	小粒食	堅 硬	—	—	
59	灰陶陶器	环	口盤	(12.6)	—	クロコ・状跡	ウス墨灰	ウス墨灰	灰 白	織 密	堅 硬	—	—	
60	灰陶陶器	环	口盤	(20.6)	—	クロコ・内・外面灰斑	灰 白	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	—	—	
61	灰陶陶器	空	口盤	(16.0)	—	クロコ・特に底部時にいたあとあり	灰 白	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	上土	—	
62	栗毛器	壺	—	—	—	クロコ・タキヤ目	高ネズミ	高ネズミ	ネズミ	織 密	良	—	検出面	
63 14	唇 部	碗	口盤	(9.8)	—	華花文幾付・内面周波状文	ウス青白	ウス青白	白	織 密	堅 硬	—	—	
64 67 21	灰陶陶器	环	底	—	(5.7)	—	クロコ・底切底・つけ高台・内面灰斑斑点状につく 鋸歯形に段あり	灰 白	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	分査調査 No.4	—
68	灰陶陶器	环	—	—	—	内クロコ・外面輪へけ目り	灰 白	灰 白	灰 白	織 密	堅 硬	No.5	—	
69	用 器	碗	口盤	(14.4)	—	クロコ・内・外輪	淡 黄	淡 黄	灰 白	織 密	堅 硬	—	—	
71 19	陶 盆	四耳壺	耳	—	—	内面剥落かなり凹凸あり 外径 0.3m以上・縁・側面の横波つまみ	緑 緑	灰 赤	灰	小粒食	堅 硬	No.6	内側輪の破片あり	
72 21	灰陶陶器	—	底	—	(14.0)	—	外クロコ・底切底へり切り・底部浮き压痕あり 内面クロコ	灰 白	灰 白	灰 白	織 密食	堅 硬	—	灰結というより灰斑質

通 号 No	器 形 No	種 別 Re	種 類 種	保存部位	寸 法			成形方法・器形の特徴	色 調			地 土 ・ 其 他	出 土 地 点 ・ その 他		
					口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)		外周輪へたけずり・内コロ・内内コロ・内部一部灰輪	灰白	灰白	灰白	良	稍 良	No.11
14	73	灰輪陶器	一	腹	—	—	—	—	灰白	灰白	灰白	良	稍 良	No.11	
75	灰窓器	一	—	—	—	—	—	—	灰白X	灰白X	青灰	密	良	No.13	
78	陶器	縁	底	—	(10.5)	—	—	—	外周輪へたけずり・内コロ・内内コロ・内部一部灰輪 底輪かかる	灰白	灰白	灰白	良	稍 良	No.25 近世
79	須恵器	縁	—	—	—	—	—	—	外周輪へたけずり・内コロ・内内コロ・内部一部灰輪	灰灰	灰灰	赤褐色	良	良	No.26
80	須恵器	縁	—	—	—	—	—	—	外周輪へたけずり・内コロ・内内コロ	灰白	灰白	灰白	良	良	+
81	須恵器	縁	—	—	—	—	—	—	土上げ壁なし・頂部二木板の洗輪と被状文 底輪へたけずり・内内コロ・内内コロ・内内コロ・内内コロ	灰灰	灰	にぶい赤	白粘合	堅硬	+
82	陶器	—	—	—	—	—	—	—	コロ・内内コロ・内内コロ	灰	灰	灰	密	堅硬	No.27
83	土師器	坏	底	—	(4.0)	—	—	—	コロ・外切面。(へらだて?)	灰	にぶい褐	にぶい褐	良	物良	No.28
15	84	陶器	急張状	口縁	(8.4)	—	—	—	コロ	黑	黑	にぶい赤褐色	密	堅硬	No.29
85	灰輪陶器	坏	底	—	(4.5)	—	—	—	内外コロ・外切面・つけ高台	灰黄	灰黄	灰黄	密	堅硬	+
87	土師器	—	底近底	—	—	—	—	—	外周輪へたけずり・内内コロ	灰白	灰白	灰白	—	—	No.33
88	陶器	灯明具	ひ燈	(10.0)	—	—	—	—	回転へたけずり。内面全部と外周の缺部分に鉛輪・外周 スス状黑色付着	黑褐	茶褐	灰系	密	堅硬	+
89	土師器	—	—	—	—	—	—	—	コロ	黑	にぶい褐	にぶい褐	小白粒合	稍 良	No.36
90	96	須恵器	—	—	—	—	—	—	外周輪へたけずり・内コロ	灰白	灰白	灰白	良	良	須恵などのフタ拭はれ 込み部分か。
91	須恵器	—	—	—	—	—	—	—	外周輪へたけずり・内ナデカ	灰	灰	灰白	密	良	环器か
92	19	須恵器	—	—	—	—	—	—	外コロキヨ・内底底あり・不整面	灰	灰	灰	密	良	+
94	19	須恵器	—	—	—	—	—	—	外コロキヨ・内底底あり・内コロナデ	灰白	灰	灰	4mmの小石合	良	No.37 陶器から知れない
95	灰輪陶器	—	—	—	—	—	—	—	コロ・内底底かくに鉛輪かかる	灰白	灰白	灰白	密	堅硬	+
96	19	陶器	灯明具	—	(9.8)	—	—	—	内コロ・外周輪へたけずり・内・外周口縁に鉛輪・内 面内コロ・内内コロ	灰茶	灰黄	灰白	密	堅硬	No.41
16	99	須恵器	縁	—	—	—	—	—	外コロキヨ・内ナデ・内面にモミ状斑点あり	暗青灰	青灰	灰赤と灰	密	良	No.49
101	19	須恵器	—	—	—	—	—	—	外コロキヨ・内ナデ・内面にモミ状斑点あり	灰	灰	灰	密	良	No.57
102	19	陶器	—	底	—	3.6	—	—	コロ・底底文化あり・外底近く移なし・外切面	赤褐	地赤褐	黑	白色胶合	堅 硬	No.58 江戸末期か
103	16	須恵器	—	縁	—	—	—	—	—	灰白	灰白	灰白	小白粒合	堅硬	No.61
104	須恵器	—	—	—	—	—	—	—	外コロキヨ	灰白	灰白	灰白	小白粒合	良	No.63 瓦器というより物輕い感じ
105	須恵器	—	底	—	7.7	—	—	—	内周輪へたけずり・内コロ・直周輪へたけずり	灰	灰	灰	密	良	No.64
106	灰輪陶器	坏	底	—	(6.3)	—	—	—	内周輪へたけずり・内・外周底点間につくつけ高台	クヌ基灰	クヌ基灰	クヌ基灰	密	堅硬	No.65
107	須恵器	坏	底	—	(8.9)	—	—	—	底コロ・内コロ・両台外側セリ上り	青灰	青灰	灰赤	密	良	+
108	16	須恵器	—	—	—	—	—	—	内周輪へたけずり・内ナデ・器形は环輪か瓶の復元で はないか?	綠灰	綠灰	綠灰	密	良	+
109	須恵器	先端部	口縁	—	(4.7)	—	—	—	外コロ・内コロ	黑灰	灰	灰	密	良	No.66
110	陶器	兩	底	—	(5.6)	—	—	—	内外周輪買入り・底内部コロ	オリーブ灰	灰白	灰白	密	堅硬	+

器 番 No	形 状 No	種 別	器種	残存部位	寸 法		成形 方 法・器 形 の 特 徴	色 調			地 土・施 工	出 土 地 点・そ の 他		
					口 (cm)	底 (cm)		外 面	内 一 面	断 面				
					高 (cm)	厚 (cm)		灰白	灰 黄	灰 白	織 窯	陶 瓦	No.68	
111	陶 器	盆	灰	—	—	(4.4)	—	内外マコナデ・底凹板へタ切り・内面階 段もなでている	黑 紫	灰 赤	暗 灰	織 窯	變 瓦	—
112	陶 器	—	—	—	—	—	ロクヨン外復盆状に階あり・内マコナデあと・タテに 模様がある	黑 紫	灰 赤	暗 灰	織 窯	變 瓦	—	
114	灰陶陶器	环	灰	—	(7.7)	—	ロクヨン・外切底・つけ両台	灰白	灰 黄	灰 白	織 窯	變 瓦	No.70	
115	灰陶器	环	灰	—	(10.2)	—	ロクヨン・つけ両台	灰	灰 白	灰 白	織 窯	魚	—	
116	灰陶陶器	环	灰	—	(8.3)	—	ロクヨンで・つけ高台	灰 白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	No.71	
117 19	灰陶器	—	—	—	—	—	外タタキ目・ロクヨン	暗 灰	灰 赤	灰 白	織 窯	魚	No.72	
118	灰陶器	—	—	—	—	—	外タタキ目・内ナデ	暗 茶	黑 暗	ネズミ	織 窯	魚	—	
119 19	灰陶器	—	—	—	—	—	外タタキ目ロクヨンのあと・内ロクヨンのあと	灰 白	灰 白	灰 白	小石舍	魚 灰	—	
120	灰陶器	—	—	—	—	—	外タタキ目・内凹底あり	灰 赤	灰 赤	灰白	織 窯	魚	—	
121	灰陶器	—	—	—	—	—	外タタキ目・内凸底あり	黑	ネズミ	黑 灰	織 窯	魚	—	
17 192	土陶質上器	环	灰	—	—	—	ロクヨン・外切底・土陶質であるが、かたい感じ	灰白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
123	灰陶陶器	环	灰	—	—	—	底凹板へタ切り・つけ両台・内面階段状につく	灰 白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
124 21	灰陶陶器	环	灰	—	(6.2)	—	底凹板へタ切り・外切底・つけ高台・内ロクヨン 重ねやせあとあり	灰 白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
125	灰陶陶器	环	口盤	—	—	—	外凹板へタ切り・内ロクヨン・輪内面及び外腹上部	灰 白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
126	灰陶陶器	—	—	—	—	—	—	灰 白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
127 19	灰陶陶器	环?	底	—	(11.4)	—	一側へタけずり・内ロクヨン・内面中央部凹底あり・底 部にモチ状底張りあり	灰 黑	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
128	土陶質上器	内耳輪?	—	—	—	—	底盤にモチ状底張り	灰白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
129	土陶質上器	环?	口盤	(22.5)	—	—	外マセナゲ・ロクヨン・内ロクヨン	灰白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
130 19	陶 器	器体	底部附近	(16.0)	—	—	けずりロクヨン・日は2木単位・巾 1.5cm・日は無い	灰 白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	—	
16 131 23	灰陶陶器	小瓶	底盤以下	—	(6.0)	—	凹板へタけずり・外切底	灰 白	灰 白	灰 白	織 窯	變 瓦	No.78	
19 134	灰陶器	环	口盤	(13.0)	—	—	ロクヨン	青 灰	青 灰	灰 白	小石舍合	魚	大村分布 No.3	
135	灰陶器	环	口盤	(12.0)	—	—	ロクヨン	青 灰	青 灰	灰 白	小石舍合	魚	—	
136	灰陶器	环	口盤	(14.4)	—	—	ロクヨン	青 灰	青 灰	灰 白	織 窯	魚	—	
137	灰陶器	环	口盤	(15.3)	—	—	ロクヨン	ウエ青灰	ウエ青灰	灰 白	魚	魚	—	
138	灰陶器	环	口盤	(16.3)	—	—	ロクヨン	青 灰	青 灰	青 灰	魚	魚	—	
139	灰陶器	环	口盤	(18.2)	—	—	ロクヨン	青灰白	青灰白	青灰白	魚	魚	—	
140	灰陶器	环置	つまみ頭	—	—	—	内ロクヨンへタけずり	ウエ青灰	ウエ青灰	ウエ青灰	小白粒多シ	魚	—	
141	灰陶器	—	—	—	—	—	ロクヨン	黑 灰	ウエ青灰	灰 白	魚	魚	—	
142	灰陶器	环置	端部	(17.5)	—	—	ロクヨン	暗青灰	暗青灰	灰白	織 窯	變 瓦	—	
143	灰陶器	环置	端部	(16.3)	—	—	ロクヨン	青 灰	青 灰	灰 白	魚	魚	—	

通 号 No	遺 物 No	形 状 Type	器種 Vessel	残存部位 Remaining Part	寸 法 Dimensions			成形方法・器形の特徴 Molding Method and Shape Feature	色 調 Color			出土場所・その他の Locality and Other Information			
					口(径) (cm)	底(径) (cm)	器(高) (cm)		外 面 Outer Surface	内 面 Inner Surface	断 面 Cross Section				
144		直筒器	环	底附近	(10.1)	—	—	ロクロ	ウス赤茶	灰白	ウス茶	良	細良	大村分布No. 3	
145		直筒器	直	口縁	(14.0)	—	—	ロクロ	ネズミ	ネズミ	ネズミ	良	良	+	
146		直筒器	直	—	—	(6.7)	—	ロクロ	青灰	青灰	青灰	良	良	+	
147		直筒器	环	底	—	(8.3)	—	ロクロ	灰白	ウス系白	ウス系白	良	良	+	
148		直筒器	环	底	—	(8.7)	—	ロクロ・内切底	灰白	灰白	灰白	小臼粒	良	良	+
149		直筒器	环	底	—	(7.6)	—	ロクロ	青灰	青灰	青灰	小臼粒	レキ合	良	+
150		直筒器	环	底	—	(10.8)	—	内切底・つ付高台	ウス系白	ウス系白	灰白	良	良	+	
151		直筒器	环	底	—	(11.7)	—	ロクロ・底へつけザリ	青灰	青灰	青灰	良	良	+	
152		直筒器	直	底	—	(8.3)	—	ロクロ・底へつけザリ	青灰	青灰	青灰	良	良	+	
153		直筒器	环	底附近	—	—	—	ロクロ	青灰	青灰	青灰	良	良	+	
154		直筒器	直	侧	—	—	—	ロクロ・タタキ用	淡青灰	淡青灰	淡青灰	良	良	+	
20	155	直筒器	直	—	—	—	—	ロクロ・腰帯つき	青灰	青灰	青灰・にぬ・赤灰	良	良	+	
156		深鉢陶器	—	—	—	—	—	タタキ目・内面ナゲ	灰白	灰白	灰白	良	堅敏	横窓の生やけか かるい	
157		深鉢陶器	环	口縁	(13.0)	—	—	ロクロ	灰白	灰白・ウス系薄	灰白	良	堅敏	内面階	
158		七面質土器	—	—	—	—	—	ロクロ	ウス茶	茶	茶	良	良	+	
159	21	土師質土器	环	底附近	—	(9.7)	—	ロクロ	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良	良	+	
160		馬文	直	—	—	—	—	沈模火	青褐	青褐	青褐	小石合	良	大村分布 No. I	
161		馬文	直	—	—	—	—	沈模火・墨帶	茶	茶	茶	良	良	+	
162		馬文	直	—	—	—	—	すりけし馬文	青褐	青褐	青褐	小石合	良	+	
163		直筒器	环	底	—	(6.7)	—	ロクロ・内切底	青灰	青灰	青灰	正	堅敏	+	
164		直筒器	环	底	—	(9.0)	—	ロクロ・内切底	灰	灰	灰	良	堅敏	+	
165		直筒器	环	底附近	—	—	—	ロクロ	灰白	灰白	灰白	良	堅敏	+	
166		直筒器	环	底附近	—	—	—	外へつけザリ・内ロクロ	灰白	灰白	灰白	良	堅敏	+	
167		直筒器	—	—	—	—	—	ロクロ・タタキ目	黒ネズ	濃青灰	赤灰	良	堅敏	大村分布 No. 2	
168		直筒器	环	底	—	(6.5)	—	底へタ切り・内ロクロ	灰白	灰白	ウス灰茶	良	堅敏	+	
169		直筒器	环	底	—	(8.3)	—	ロクロ・内切底	青灰	青灰	淡青灰	良	堅敏	+	
170		直筒器	环	口縁	(12.3)	—	—	ロクロ	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良	良	生やけか	
171		直筒器	环	口縁	(14.3)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	濃青灰	良	良	+	
172		直筒器	环	口縁	(15.5)	—	—	ロクロ	灰茶	青灰	青灰	良	良	+	
173		直筒器	环	口縁	(14.3)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	灰白	良	良	+	
174		直筒器	—	—	—	—	—	けザリ・内面ロクロ	灰白	灰白	灰白	良	良	* 横窓などのよきいた部分か	

番号	種別	器種	疾患部位	寸法			成形方法・器形の特徴	色調			地土・機械	出土地点・その他	
				口(深)	底(深)	幅(高)		外	内	底			
175	頭蓋骨	杯	底	—	(8.4)	—	ロタリ・つけ高台	灰白	灰白	灰白	良	及	大村分布No. 2
176	頭蓋骨	杯	底	—	(10.0)	—	ロタリ	鐵青灰	ウス青灰	青灰	良	及	—
21 177	頭蓋骨	杯	端部	—	(15.7)	—	—	ウス青灰白	青灰	青灰	良	良	—
178	頭蓋骨	杯	端部	—	(17.7)	—	ロタリ	ウス青白	灰白	灰白	良	良	生やけか
179	頭蓋骨	—	—	—	—	—	ロタリ・骨髄面あれ	灰白	灰白	灰白	良	堅	—
180	頭蓋骨	—	頭	—	—	—	ロタリ	黑灰	黑灰	黑灰	良	良	—
181	頭蓋骨	—	口縫	(37.0)	—	—	ロタリ	青灰	青灰	灰赤	良	良	—
182	土師質土器	—	底附近	—	(18.4)	—	ロタリ	ウス青白	茶白	茶白	良	小白粒含	良
183	灰陶陶器	杯	口縫	(10.8)	—	—	ロタリ	灰白	ウス黄緑	灰白	良	堅	—
184	灰陶陶器	杯	底	—	(9.3)	—	内面ロタリ・底へテ切り	灰白	灰白	灰白	良	堅	—
185	土器	高杯	杯	—	(3.1)	—	ロタリ	茶	茶	茶	良	良	—
186	陶器	杯	底	—	(3.8)	—	—	ウス紺系墨	ウス紺系墨	灰白	良	堅	— 内外同様 實入あり
187	陶器	灯明壺	口縫	(9.5)	—	—	ロタリ	ウス青白	ウス紺系乳白	ウス青白	良	堅	— 内面と外面同様にあり
188	頭蓋骨	—	底	—	(9.4)	—	ロタリ・舟切底	青灰	青灰	青灰	良	良	大村分布No. 3, 4
189	頭蓋骨	杯	底	—	(8.5)	—	ロタリ・つけ高台	灰白	灰白	灰白	良	堅	—
190	頭蓋骨	杯	端	(15.8)	—	—	ロタリ	灰白	灰白	灰白	良	良	—
191	頭蓋骨	長縫瓶	瓶	—	—	—	ロタリ・内面しづり風あり	青白	灰白	ウス灰赤	良	良	—
192	頭蓋骨	—	頭	—	—	—	ロタリ	青灰	青白	にじ赤灰	良	良	—
193	頭蓋骨	—	—	—	—	—	外周ロタリ口・内面ナメ	ウス青灰	ウス青白	灰白	良	良	—
194	頭蓋骨	裏	側	—	—	—	ナタキ口・ナメ	灰白	灰白	灰白	良	良	—
195	頭蓋骨	裏	側	—	—	—	ナタキ口	青灰	灰白	灰白	良	良	—
196	頭蓋骨	裏?	頭?	—	—	—	—	灰々灰	灰白	灰白	良	良	— 沈線と後状文
22 197	頭蓋骨	杯	口縫	(12.6)	—	—	ロタリ	青灰	灰白	灰白	良	良	大村分布No. 6
198	頭蓋骨	杯	底	—	(10.5)	—	ロタリ・舟切底	青灰	青灰	青灰	良	良	—
199	頭蓋骨	瓶	—	—	—	—	—	青灰	青灰	青灰	良	良	— 痕の痕としてつけた部分
200	土器	瓶	底	—	(10.4)	—	ナメ	茶褐色	茶褐色	茶褐色	良	良	— 雜文
201	頭蓋骨	杯	端	(13.4)	—	—	テナギ足・内面ロタリ	青灰	青灰	青灰	良	良	—
202	頭蓋骨	杯	端	(14.1)	—	—	ロタリ	青灰	青灰	灰白	良	及	—
203	土師質土器	—	底	—	(9.1)	—	ロタリ	黃茶	黃茶	黃茶	良	良	—
204	陶器	小形瓶	底	—	(16.4)	—	ロタリ・底けざり	黃茶	黃茶	赤茶	良	堅	—
205	陶器	こね跡	口縫	(19.0)	—	—	—	黃白	黃白	灰白	良	堅	— 内面輪

通 号 No.	出 土 地 點 No.	種 別	形 状	底 部 性 質	寸 法		成 形 方 法	器 形 の 特 徴	色 調			胎 土 ・ 燒 成	出 土 地 點 ・ そ の 他	
					口 (cm)	底 (cm)	高 (cm)		外 面	内 面	裏 面			
206	周 都	茶 碗	底	—	—	(4.5)	—	口クロ	ウス緑	ウス緑	灰白	良	堅 軟	大村分布No.6 陶面ウス緑釉質入底、内底既燒
207	21	土師器	壺	口縁 (23.4)	—	—	—	口クロ・内面上面ハケ有	ウス高	茶 緑	茶	良	良	+
208	21	土師器	壺	脚下	—	—	—	外面クロハケ口・内面さきあげか調整不良の凸あり	茶 緑	こげ茶	茶	良	良	+
209	21	土師器	壺	底	—	(9.9)	—	底面水詰厚くモリ上がる・内面強い斑痕あり	黒 茶	茶 緑	茶 緑	良	良	+
210	219	須恵器	环	底	—	(8.3)	—	口クロ・赤切	青 灰	青 灰	青 灰	良	良	+
211		須恵器	环	底	—	(7.4)	—	口クロ・赤切	ウス青灰	ウス青灰	ウス青灰	良	良	+
212		須恵器	环	底	1/4	15.0	—	外ヘラけザリ・内ロクロ	青 灰	青 灰	青 灰	良	小レキ 良	補削及内面外側灰白色
213		須恵器	碗?	底?	—	(8.3)	—	口クロ	灰 白	灰 白	灰 白	良	白色粗合 良	+
214		須恵器	—	—	—	—	—	タマキ口圓心内文	暗 灰	暗 灰	灰 赤	良	小音粒合 良	+
215		須恵器	环	底	—	(16.7)	—	外ヘラけザリ・内ロクロ	青 灰	青 灰	青 灰	良	良	外底褐色灰黑色
216		須恵器	粗粒物	碗	(11.7)	—	—	—	青灰・灰白	青灰・灰白	灰 白	良	磨やわらか表面あれ	+
217		灰陶陶器	碗	底	—	(11.4)	—	内ロクロ・底ヘラ切り・つけ高台	灰 白	灰 白	灰 白	良	小粒合 鮮麗	+
218		須恵器	—	底	—	(12.6)	—	内、外クロナゲ	灰白一型青黒	灰	灰 赤	良	良	+
219		須恵器	—	—	—	—	—	口クロ	灰 白	灰 白	灰 白	良	良	+
220		須恵器	—	—	—	—	—	—	灰 白	灰 白	灰 白	良	良	+
221		須恵器	碗	底	—	—	—	タマキ口・内面カゲ	灰 白	灰 白	灰 白	良	良	+
222		須恵器	碗	底	—	—	—	タマキ口・内面ヨコナゲ・外底薄茶色の附ハケ	灰 白	灰 白	灰白	良	良	+
223		陶 器	—	—	—	—	—	まき上げクロ・熱焼くかかる	うぐいす色	うぐいす色	赤系ねずみ	良	堅 軟	+
224		土師瓦上器	壺	口縁 (22.7)	—	—	—	口クロ	白 茶	白 茶	白 茶	良	良	+
225		陶 器	小鉢	口縁 (22.8)	—	—	—	口クロ	にぶい緑	にぶい緑	にぶい緑	良	堅 軟	+

表4 石器一覧表

標 名 Na Na	遺物 Na	区版 Na	出 土 採集地	器 種	寸 法			重 量 g	石 質	備 考
					長さ cm	巾 cm	厚さ cm			
1	17	14	2住	打製石斧	10.6	5.1	1.4	82.2	粘板岩	
2	33		1/Na 1	石 砺	1.9	1.6	0.3	0.81	磨鑿石	
5	65	17	58- Na 1地点	凹 石	5.3	5.6	1.8	64.7	安山岩	惣社地区表採遺物
"	66	18	" Na 2 "	打製石斧	10.0	6.8	1.6	127.0	綠色麻灰岩	"
"	70	17	" Na 6 "	凹 石	18.0	19.3	9.2	4100.0	安山岩	"
6	74	18	" Na 13 "	打製石斧	11.0	5.5	2.2	122.9	粘板岩	"
"	76	18	" Na 15 "	"	(4.6)	4.5	1.5	(42.1)	砂質粘板岩	"
"	77	18	" Na 25 "	"	13.7	6.1	4.0	410.0	粘板岩	"
7	86	18	" Na 30 "	"	(8.0)	3.6	2.3	(108.3)	"	"
"	93	18	" Na 36 "	"	(7.4)	6.3	2.2	(109.7)	粘板岩・砂岩	"
"	97	18	" Na 45 "	凹 石	6.7	7.8	4.3	263.5	砂 岩	"
8	98	17	" " "	"	9.5	10.4	7.0	850.0	"	"
"	113	18	" Na 59 "	打製石斧	(6.0)	6.4	1.8	(67.1)	綠色麻灰岩	"
9	131	18	" Na 72 "	"	11.3	7.5	1.8	224.1	石墨板岩	"
"	132	20	" " "	凹 石	11.3	11.4	8.4	1190.0	安山岩	"
10	133	20	" Na 76 "	"	16.3	14.7	5.9	1620.0	砂 岩	"
"	134	20	" " "	"	10.5	14.0	4.5	655.0	"	"
			57- Na 6 "	打製石斧	(9.8)	5.0	1.9	(141.5)	粘板岩	大村地区表採遺物
			"	"	(5.9)	5.4	2.3	(83.7)	"	"

表5 鉄製品一覧表

標 名 Na Na	遺物 Na	区版 Na	出 土 採集地	器 種	寸 法			重 量 g	備 考
					長さ cm	巾 cm	厚さ cm		
1	18	14	2住Na 8	釘状製品	4.0	1.6	1.4	8.3	
"	19	14	2住Na 2	刀 子	9.4	2.3	0.5	26.1	
2	34	14	1/ 1	釘状製品	2.9	1.2	0.9	5.2	
"	35	14	"	"	3.7	0.6	0.6	2.9	
"	36	14	"	"	2.3	0.7	0.5	2.1	
4	64	14	換出面	刀子状製品	11.3	3.2	0.6	49.9	
8	100	21	Na 49地点	古 錢					錢名不明 惣社地区表採

図 版

桑園近景

発掘状況
表土はぎ

発掘状況



発掘状況

第2号住居址



溝状遺構

(西より)



溝状遺構他

(南より)



発掘状況



発掘状況



現地指導



現地指導

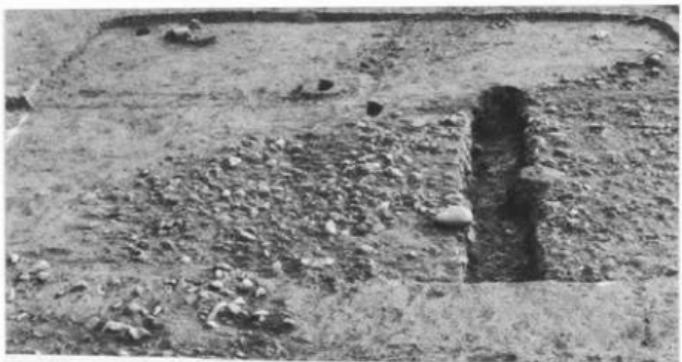


第1号住居址
(東より)



同ピット





第2号住居址
(西より)



同遺物出土状況



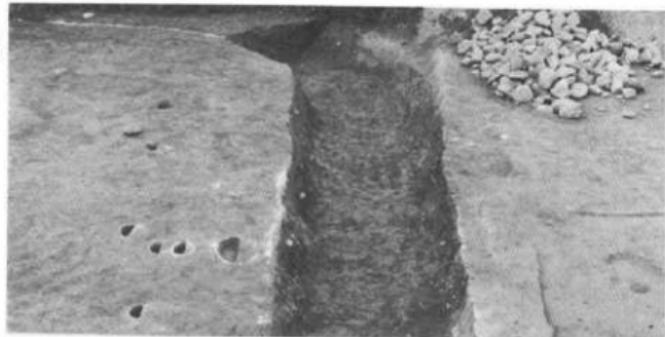
溝状遺構
遺物出土状況

溝状遺構



溝状遺構

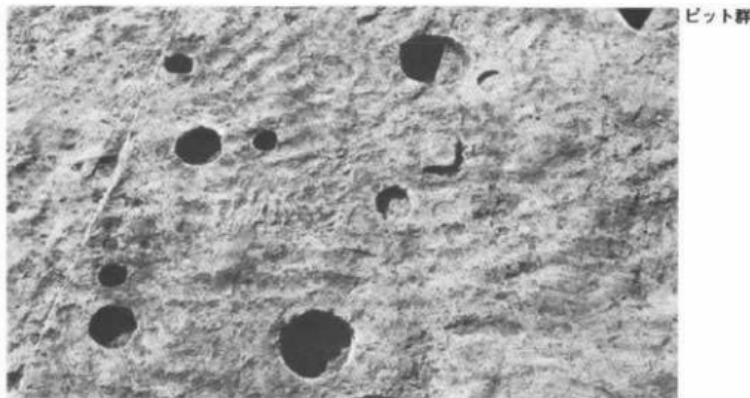
振り上げ状況



溝状遺構

東端部





礫群
東寄り部分



溝状遺構確認
グリット
(南西屈曲部)



発掘地区
掘り上げ全景(1)





発掘地区
掘り上げ全景
(北より)



埋め戻し作業



調査参加者

分布調査地 (1)

No.77



No.22



No.25





分布調査地（2）
No.36



No.38



No.56

分布調査地

No.30



発掘地点より

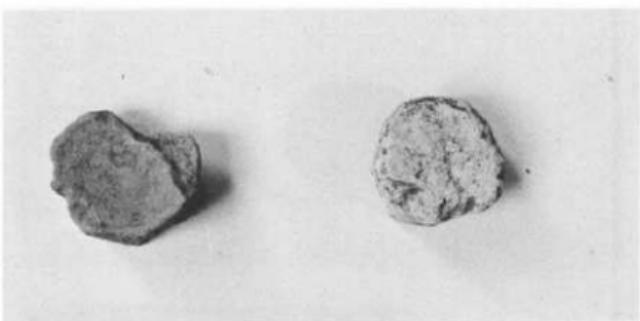
東南の伊和神社

(遠方の森)を望む



出土遺物(1)

43・20

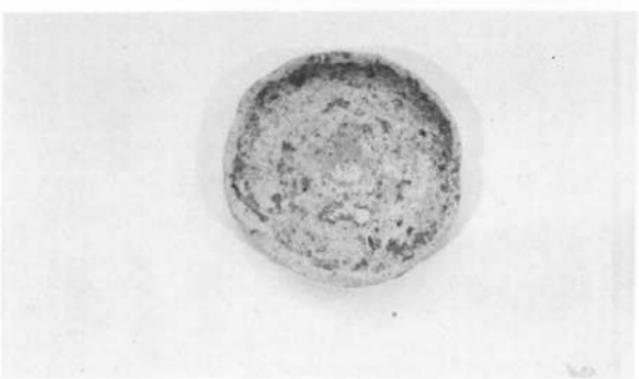


1・22・11・3

12・23

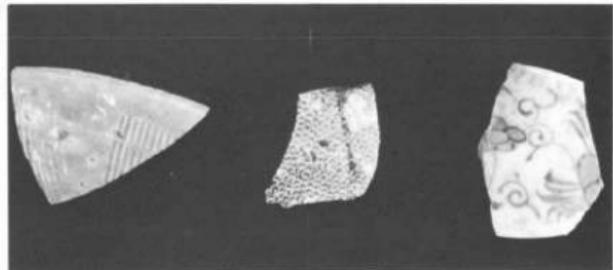


2



出土遺物(2)

30・51・63

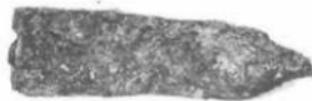


17



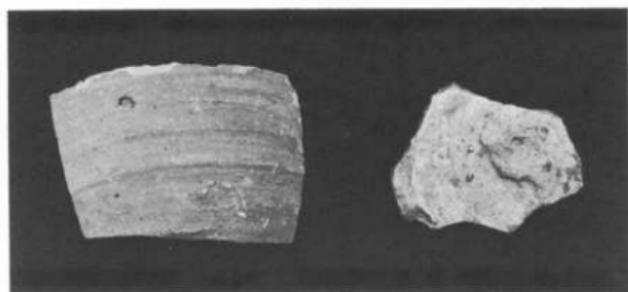
19・18

64 34・35・36

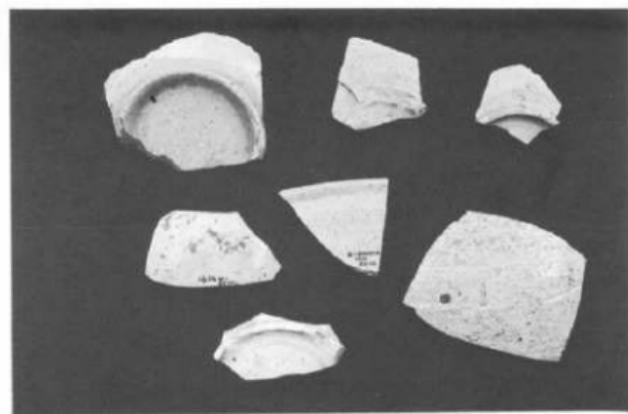




出土遺物(3)
57



58・45



15・25・26
49・13
48・16

分布調査
表探遺物(1)
81



79
(表面)



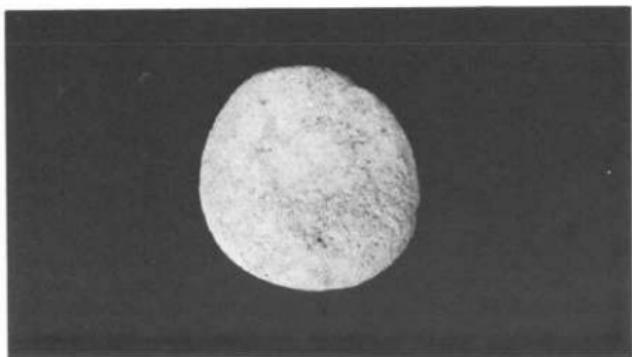
79
(裏面)



90・103・108



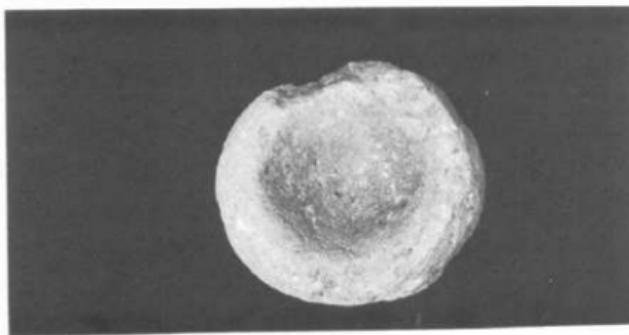
分布調査
麥採遺物(2)
65



70



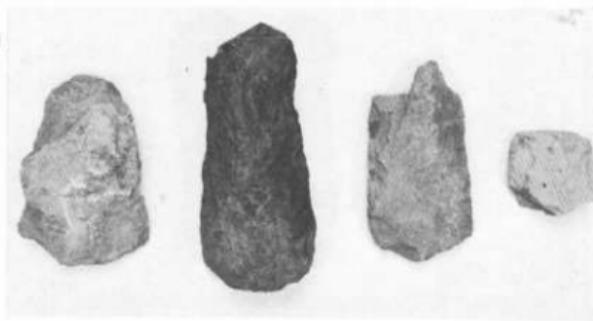
98



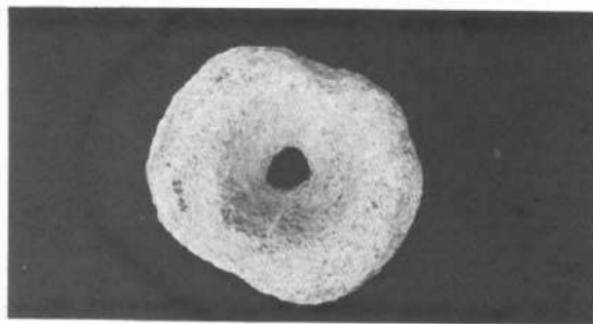
分布調査

表採遺物(3)

66・77・74・76



97



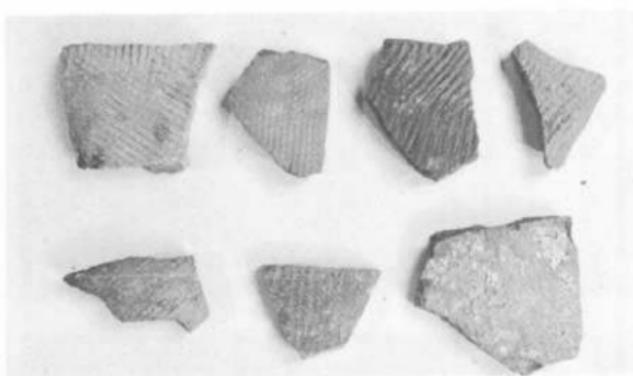
86・93・113・131



分布調査
表探遺物(4)
102・71
96・130



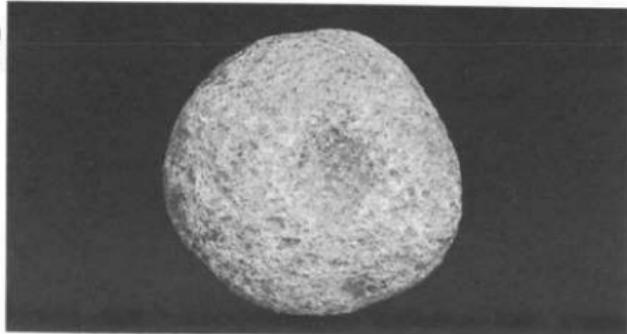
80・92・99・101
119・117・94



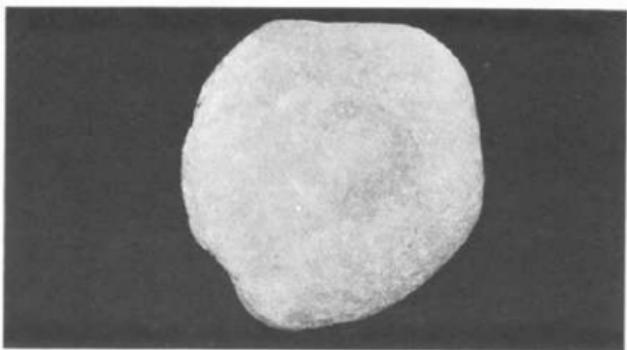
127
(右、拡大図粒痕)

分布調査
表探遺物(5)

132



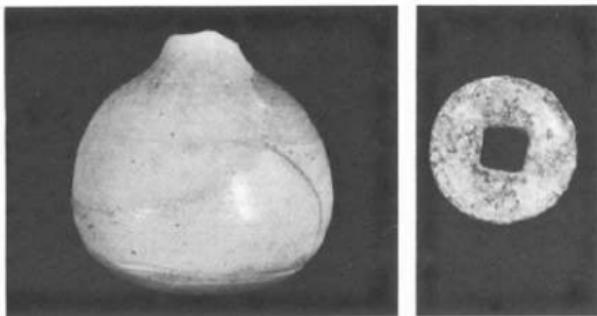
133



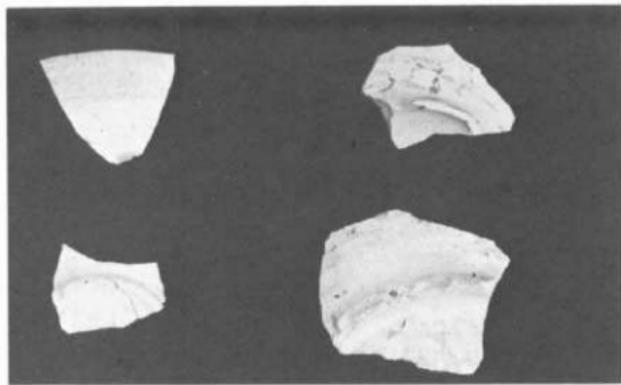
134



分布調査
表採遺物(6)
209・208・207



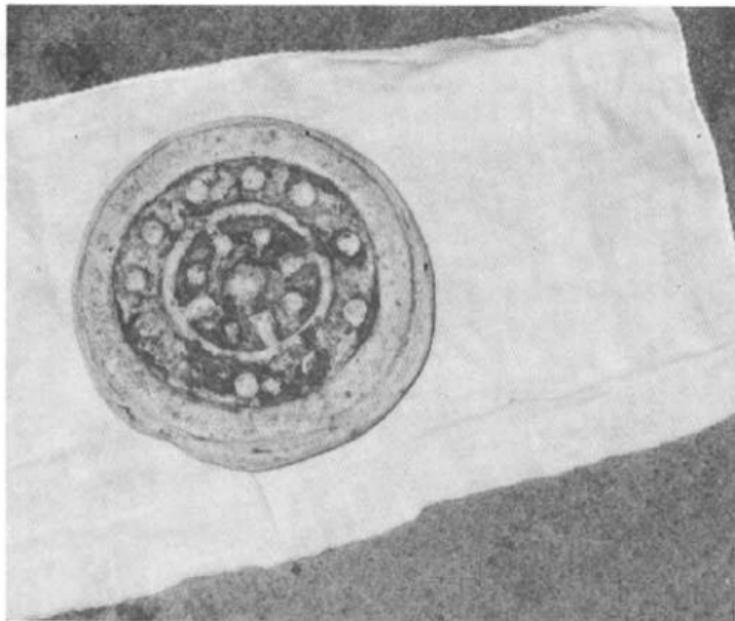
131・100



159・124
67・72

軒丸瓦

大村堂田出土



木鼻

大村堂田出土



松本市文化財調査報告No.83

—推定信濃國府第二次発掘調査報告書—

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 株式会社綜合印刷

